R E H K

Revista de Estudios Hispánicos de Kioto

—第12号—

《講　演》

Luis de Góngora *Soledades* の生成
—第一部 serranas の描写を中心に—
..... 吉　田　彩　子　(1)

《論　文》

中世今帰仁のハスいわゆる卍紋を考える
..... 上　間　　篤　(23)

Una reflexión sobre la importancia del comercio de añil en Nueva España (1558-1810)
..... Makiko Murata　(35)

La ideología y los actos de Jack Shirai en la guerra civil española según el testimonio de Harry Fisher
..... Keishi Yasuda　(53)

《書　評》

山﨑眞次著『メキシコ—民族の誇りと闘い—多民族共存社会のナショナリズム形成史』新評論　2004年
..... 立　岩　礼　子　(69)

ホルヘ・フランコ著『ロサリオの鋏』河出書房　2003年
..... 中　村　多文子　(73)

2004年
京都イスパニア学研究会
Asociación de Estudios Hispánicos de Kioto

Luis de Góngora *Soledades* の生成
—第一部 serranas の描写を中心に—

吉田彩子

はじめに

私はルイス・デ・ゴンゴラの研究を専門にしておりますので、本日も、ゴンゴラのお話しをしたいと思います。本日のテーマは、*Soledades* のテキスト（本文）にゴンゴラの別の作品（むろん、それ以前の作品ということになりますが）のテキストが取り込まれている、という問題です。

Soledades は、ゴンゴラがそれまでの、比較的理解しやすい、当時の一般的な詩風とそれほど隔てのない作風を一変させて、のちに gongorismo と呼ばれることになるスタイルを完成させた、詩人の代表作とされております。そして gongorismo の特徴といえば、奇抜な隠喩、きらびやかで色彩豊かな表現、特殊な語彙の使用、hipérbaton（転置法）といった、表現上の特徴、表現の細部にかかわる問題として理解されております。

ところで、gongorismo とはゴンゴラ風の文体である、そして、それは culteranismo （ダマソ・アロンソにしたがって cultismo といいかえてもよろしいですが）と同義であるというのが、現代の定義でございます。そして *Soledades* は culteranismo の技法を完成させた作品として理解されております。ですから *Soledades* のテキストにそれ以前のテキストがはめ込まれていると言えば、「二人のゴンゴラ」の通説を否定したダマソ・アロンソの主張[1]を、いまさら事新しく繰り返すのかと思われるかもしれません。私が申したいのは、そういうことではありません。

「二人のゴンゴラ」をめぐるアロンソの論旨は、いささか錯綜して

---

[1] Dámaso Alonso, *La lengua poética de Góngora*, Parte Primera, Madrid, 1978 (*Obras completas*, tomo V, pp. 9-238).同書は 1927 年度 Premio Nacional de Literatura 受賞論文であるが、出版はこれに改訂増補を加えた 1935 年版が最初である（Madrid, 1935, Anejo XX de la *Revista de Filología Española*）。本論での引用は *Obras completas* による。

おります。ゴンゴラの作品群は二つの相反する傾向（現実逃避と現実主義）に分類され、その意味では「二人のゴンゴラ」は存在した。ただし二つの傾向は生涯を通じて並存し、また、どちらの作品群にも難解なものと平易なものが共存している[2]。つまりアロンソが否定するのは、「難解な作品」と「平易な作品」という分け方、それに基づいて、作風に年代的な変化があったとする説[3]なのです。

俗説は打破されてしかるべきですが、詩人の年代による変化まで否定してしまったのは勇み足でしょう。*Polifemo* と *Soledades* が発表されたあとで、とりわけ後者を巡って論争が起こったという事実から、これらの作品には、それまで人びとがゴンゴラについて持っていた理解を超えるものがあったと考えざるをえません。

50歳を過ぎていきなり遍歴の騎士になったのはアロンソ・キハーノですが、虚構の物語のなかでさえ、この転身は「狂気」によるものと説明されております。50を過ぎた人間がそれまでとは違ったことをするというのは尋常なことではございません。アロンソ・キハーノの転身が周囲の人びとを困惑させたように、ゴンゴラの *Polifemo* と *Soledades* はそれまで彼の詩になじんできた人々を大いに困惑させました。

この困惑は何によるものだったのでしょうか。ダマソ・アロンソのいう、cultismo の技法の過剰、その結果として生まれる判読上の困難につきるものなのでしょうか。ゴンゴラが *Polifemo* と *Soledades* で到達した新境地は、ひとつひとつたどっていけば彼の初期作品に（それどころかゴンゴラ以前の詩人にも）見出されるような「技法」の集積に還元されるものではないと、私は考えております。多くの文学史が、*Soledades* を gongorismo＝culteranismo の完成と位置付けていることも、間違いではないが間違った結論に導きやすい、一面的な評

2　同書、pp. 21-24。しかしながら、アロンソの論述の問題点は、「平易」と「難解」の二項対立を否定するいっぽうで、「現実の理想化（現実逃避）」と「現実への接近」という二項対立を簡単に受けいれてしまうことにあろう。ここから、彼の *soledades* 解釈は審美主義への道をひた走ることになる。

3　「*Polifemo* と *Soledades* を発表したゴンゴラは prícipe de la luz から príncipe de las tinieblas に変化した」というフランシスコ・カスカーレスの論評がメネンデス・ペラヨの記憶違いを経て「光の天使」「闇の天使」の俗説になっていく過程は、アロンソ、pp. 13-14 を参照。

価と考えております。

Soledades という作品がどうしてあれほど 17 世紀の読者を困惑させたのか。それは作品が、文体だけではなく、もっと総合的な意味で、「新しい詩」だったからです。それなのになぜ、後世は、これによってもたらされたものを gongorismo とよび、作品の評価を文体にのみ認めてきたのか。それは、17 世紀の批評家たち、この作品に対して起こった猛烈な批判に対して作品を擁護した人びとが、作品の新しさを定義する理論を見出せなかったからです。ローペ・デ・ベガは古典の作劇法に従わない nueva comedia を、なかば冗談めかして、観客の好みを根拠に打ち立てることができました。運のよいことです。ゴンゴラの擁護を展開した人文学者たちは、冗談は得意ではなかった。詩の目的は「愉しみと教化」であるという古典の理論から離れることができず、作品に「教化」の要素が見出せないことから「愉しみ＝美」を強調することになりました[4]。これらの擁護論とアロンソの「純粋な美の悦び」を隔てるものはありません。私たちの *Soledades* 理解はこの批評のゆがみのうえに、いまだに、成り立っております[5]。

Soledades とは、本当はどんな作品なのか。後世の批評の迷路に迷い込むことなく、ありのままの *Soledades* に近づくにはどうすればよいのでしょうか。それは三つの方法により可能になると私は思っております。

ひとつは、17 世紀の論争文献をつぶさに読み直すことです。作品をめぐる批判と擁護が、何を問題にしているのかを見ていくことにより、この作品の新しさはどこにあったのか、何が人々を困惑させたかがわかってまいります。この分野の研究は、1960 年代にエミリオ・オロスコによるグラナダのゴル侯爵家の古文書の発見が契機となりまして、この 20 年くらいは特に盛んになってきております。

---

[4] Pedro Díaz de Rivas, *Discursos apologéticos por el estilo del "Polifemo" y "Soledades"* (editado en E.J.Gates, *Documentos gongorinos*, México, 1960, pp. 35-67) および Martín Vázquez Siruela, *Discurso sobre el Estilo de Don Luis de Góngora y Carácter Legítimo de la Poética*,(edición por Saiko Yoshida en *Autour des Solitudes. En torno a las Soledades de Luis de Góngora*, Anejos de *Criticón*, 4, Toulouse, 1995, pp. 91-106)の論点である。

[5] Robert Jammes, "Rétrogongorisme", *Criticón*,1, Toulouse, 1978, pp. 1-82 を参照。

もうひとつは、テキストの正確な理解です。あたりまえではないか、と思われますが、それほど簡単ではありません。*Soledades* のテキストは何を語っているのか、ゴンゴラは何と表現しているのか、主観的な解釈、読者（研究者）の自分勝手な文学論を交えずに読み取る、解読する、ということです。80年代以来、フランスのロベル・ジャムが explicación literal 字句どおりの説明、として提案していることですが、後世の批評のゆがみから解放される読み方です。ゴンゴラが作品のなかで語ることだけに耳を傾ける。この場合には、辞書的な根拠によることはもちろんですが、論争をきっかけとして書かれた膨大な注釈、評釈も参考にする必要が生じます。これが、それほど簡単ではありません。17世紀半ばにつくられたリストには（評釈だけでなく、ゴンゴラの詩について言及した人を含んでいますが、）すでに50人以上の名前があがっています。また、これらのゴンゴラと同時代に彼の詩の解釈について言及した文献のうちかなりのものが、まだ出版されずに手稿のままで眠っています。ゴンゴラ研究の困難は、テキスト理解の難しさではなく、読むべき文献の多さであると、ロベル・ジャムが言っております[6]。「字句どおりに」正しく解釈するためには、テキストの何倍もの（時には何十倍？もの）文章を読まなければならないことにもなります。

第3の方法は、ゴンゴラが作品、テキストを生み出す現場に、できるかぎり立ち返ってみるというものです。第2の方法とは反対の方向から、テキストに近づくといったらいいでしょうか。奇抜な隠喩、複雑な構文、難解なテキスト、というのは、創作行為がおこなわれた結果であります。どうしてそんなテキストが書かれることになったのか、創出のプロセスというか生成の過程を、辿れるものなら辿ってみたい。それを辿ることによって、テキストの正確な意味が確定できることがあるからです。ふつうは推敲過程の研究でそういうことをおこなう場合が多いのですが、*Soledades* には、それ以前の作品の部分が取り込まれていることがある。ゴンゴラが1613年に作り出した「新しい詩」に、彼の古い詩のパーツがはめ込まれていたとすれば、それはどうい

---

[6] Robert Jammes, "Presentación de las *Soledades*", *Góngora Hoy I-II-III*, edición de Joaquín Roses, Córdoba, 2002 (Diputación de Córdoba), p. 21.

うことなのか。古いパーツは、どのようにして新しい詩を構成することになるのか。そういう問題を、本日は考えてみたいと思います。具体的には、*Soledades* 第一部の serranas が登場する場面との関係がよく指摘される、クエンカの serranas を歌ったロマンセ En los pinares de Júcar（1603）です。

1．　Cuenca のロマンセ

このロマンセをすぐに思い浮かべられるかたは少ないと思いますので、まず全文に拙訳を付して示します。

En los pinares de Júcar	フカルの松林で
vi bailar [3] unas serranas	山の娘たちが踊るのを見た
al son [3] del agua en las piedras	石に砕ける水の音と
y al son [3] del viento en las ramas;	枝に騒ぐ風の音にあわせて。
no es blanco coro de ninfas	水に住まうあの
de las que aposenta el agua,	ニンフらの白い群れではない、
o las que venera el bosque,	森がうやまうあの
seguidoras de Dïana [5]	ディアナに従うものたちでもない、
serranas eran de Cuenca,	クエンカの山の娘たち、
honor de aquella montaña	彼女らの足にくちづけようと
cuyo pie besan dos ríos	山裾に二本の川がくちづける
por besar de ellas las plantas;	あの山の誇りである。
alegres corros tejían [9]	陽気な群れを織りなしていた
dándose las manos blancas,	白い手をとりあって、
de amistad, quizá temiendo	くるりと回れば友情が
no la truequen las mudanzas.	壊れることを恐れるように。
¡Qué bien bailan las serranas!	*山の娘たちは巧者に踊る！*
¡Qué bien bailan!	*巧者に踊る！*
El cabello en crespos nudos	髪は波打つ巻き毛となって
luz da al sol, oro a la Arabia,	太陽に光を、アラビアに黄金をあたえる、
cuál de flores impedido,	あるものは花をまきつけ、

	cuál, de cordones de plata.	あるものは銀のリボンで留めて。
	Del color visten del cielo,	空の色を身に纏う
	si no son de la esperanza,	希望の色でなければ、
25	palmillas que menosprecian	サファイアとエメラルドを
	al zafiro y la esmeralda.	ものともしないパルミーリャ織。
	El pie, cuando lo permite	足は、スカートの
	la brújula de la falda,	覗き穴[7]がゆるすときは、
	lazos calza, y mirar deja	紐を履いて見せてくれる
30	pedazos de nieve y nácar. [10]	雪と真珠母（ナカル）のかけらを。
	Ellas, en su movimiento [4]	彼女たちは、動くときに、
	honestamente [4] levantan	慎みぶかく建てる
	el cristal de la columna	柱の水晶を
	sobre la pequeña basa, [11]	小さな柱基のうえに、
35	*¡Qué bien bailan las serranas!*	*山の娘たちは巧者に踊る！*
	¡Qué bien bailan!	*巧者に踊る！*
	Una, entre los blancos dedos	ひとりは白い指のあいだに
	hiriendo negras pizarras [2]	黒いスレートを打ちつける、
	instrumentos de marfil [6]	ムーサたちも羨むだろう
40	que las musas le invidiaran,	象牙の楽器は、
	las [12] aves enmudeció [1]	鳥たちを沈黙させ
	y enfrenó [1] [12] el curso del agua [7]	水の流れをゆるめた。
	no se movieron las hojas [8]	歌を聴き取るために
	por no impedir lo que canta:	木の葉は動かなかった。
45	*Serranas de Cuenca*	*クエンカの山の娘は*
	iban al pinar,	*松林に行ったもの、*
	unas, por piñones,	*あの娘らは松の実めあて、*

---

[7] Bernardo Alemany y Selfa は brújula を、ターンするとき円形に持ち上がるスカートを羅針盤にたとえたとする(*Vocabulario de las obras de Don Luis de Góngora y Argote*, Madrid, 1930)。しかし“Corcilla temerosa”(1582)における類似表現から、スカートが揺れた拍子に足が見える意ととる。

y otras, por bailar.	*この娘らは踊りに。*
Bailando, y partiendo,	美しい山の娘たちは
las serranas bellas,	踊りながら、また松の実を
un piñon con otro,	真珠でなければもう一つの
si ya no es con perlas,	松の実で割りながら、
de Amores las saetas	アモルの矢を
huelgan de trocar,	投げ合って遊ぶ、
unas, por piñones,	*あの娘らは松の実めあて、*
y otras, por bailar.	*この娘らは踊りに。*
Entre rama y rama,	枝のあいだで、
cuando el ciego dios	盲目の神が
pide al sol los ojos	娘たちをよく見ようと
por verlas mejor,	太陽に目を求めるとき、
los ojos del sol	娘たちが太陽の目を
las veréis pisar,	踏むのを見るだろう、
unas, por piñones,	*あの娘らは松の実めあて、*
y otras, por bailar.	*この娘らは踊りに。*
(Texto por Antonio Carreira[8])	(吉田訳)

注）囲み線は『孤独』との共通部分であり数字で対応箇所を示す。
v.43 の el curso del agua は 7,12 の 2 箇所に対応するので囲み線と網掛けで示す。

このロマンセの製作は 1603 年とされていますから、*Soledades* 第一部よりほぼ 10 年前の作品ということになります。この年、ゴンゴラはとある扶持僧候補者の血統調査のためにクエンカに派遣されました。調査は 5 月 6 日に終了し、その後あたらしくコルドバ司教に選ばれた人物に挨拶するため、これも司教座参事会から命じられてのこと

[8] Luis de Góngora, *Romances, II*, edición de Antonio Carreira, Barcelona, Cuaderns Crema, 1998, pp. 111-116.

ですが、当時王都となっていたバヤドリッドに向かいました[9]。ロマンセは、このクエンカでの滞在中に目にした serranas つまり山岳地帯の娘たちの姿を歌ったものだということになっています。当時クエンカの民俗舞踊がとても珍重されていて、フェリペ３世も 1604 年に見物したそうです[10]から、ゴンゴラも公用の合間にクエンカ観光を楽しんだのでしょう。滞在の時期は４月から５月にかけてと思われますから、ロマンセに描写される季節は *Soledades* 第一部と完全に一致することになります。

形式的には８音節から成る前半と、６音節からなる後半に大きく分かれ、詩節は８行（４行詩２連）が基調です。さらに、８音節の初め２節が共通の反復句をもち、６音節の最後の２節が共通する２行で終わります。８音節部と６音節部のつなぎ目には、８音節だが反復句を持たない１節と、６音節だが４行しかない１節が置かれ、この６音節４行詩は後にくる２節の共通部分（unas, por piñones,/y otras, por bailar）を導入する、という構成になっています。

前半と後半では内容にも変化が見られます。前半は「フカルの松林で」踊る serranas の描写です。整然とした群舞、娘たちのヘアスタイルと衣装、そしてスカートが舞い上がる激しい動き。第１節で娘たちは水のせせらぎと松風にあわせて踊ったといいながら、第３節でスレート（tejoretas）を打って歌う娘が登場するのは矛盾するようですが、まず無伴奏で踊りが始まり、あとから歌が入るという実写なのかもしれません。

後半は、娘たちが松林に何をしに行くのかという、すこしふざけたおしゃべりです。前半の始まりを受ける形で、踊りに行く娘もいるだろうが、松の実採りという目的もあると。「松の実」には卑猥な意味もあるので、por piñones はいつも二重の意味で用いられることになり、エロティックなほのめかしがアモルを登場させます。踊ったり松の実をおやつにしたりしながら、娘たちがアモルの矢で遊ぶ（危険な愛に戯れる）というのは、山間部の女性の奔放な性への言及でしょうか。

---

[9] Miguel Artigas, *Don Luis de Góngora y Argote. Biografía y estudio crítico*, Madrid, 1925, p. 83.
[10] Robert Jammes, *La obra poética de Don Luis de Góngora y Argote*, Madrid, 1987, Editorial Castalia, p. 374, nota 138.

最終節は、アモルは盲目の神であることと、木漏れ日が地面に作る三日月模様を「太陽の眼」と呼ぶことから思いついての言葉遊びに終始します。

前半は抒情詩でも後半はバーレスクということになり、これは *Soledades* で行なわれるジャンルの混交に通じます。Serranas を神話のニンフになぞらえる、彼女らの髪や衣服を黄金や宝石と比べるというのも、*Soledades* と共通です。

2. *Soledades* の serranas

Soledades 第一部は三日間のできごとを扱っていて、山の娘たち（serranas あるいは montañesas と本文では表現）が登場するのは2日目のことです。Serranas にかかわる描写があるのは、(1) 237～283 行、(2)335～349 行、(3)540～561 行、の三箇所です。

(1)は serranas が登場する場面です。考え事をしながら山をおりてきた主人公に楽器の音が聞えて、見れば一人の娘が川面に枝を伸ばした木の幹に寄りかかって弦楽器を爪弾いていた。轟々と音をたてて流れていた川は今はゆるやかに、ほとんど音をたてずに流れている。川辺には手で水を汲んで顔を洗う娘や、バラやユリの花を摘んで髪に挿す娘。指に挟んだスレートを打ち鳴らす娘。この楽器（tejoretas）にあわせて一人の娘が踊りはじめる。踊りの振りは淫らだが目は慎ましい。誘われるように他の娘たちも踊り、野は彼女たちの乱舞で埋め尽くされる。麓の村の婚礼に向かう serranas なのだが、木の洞に隠れて眺めている主人公には、この大騒ぎが何なのかわからない。バッカスに従う狂女たちにしてはシレノスの姿が見えない。肩には矢筒がないから、ディアナに従うニンフたちでもない。川のほとりにいる女たちだからアマゾン族と思いたいが、この娘たちは甲冑を着けていないし、戦おうともしていない。続く2行（281～282）で、男にも女にも監視されずに、解放されて騒いでいる村の娘たちだと若者は考えた、とあり、アマゾネスという可能性も否定されておわります。

以上の内容にロマンセと共通する要素があることは、もうお気づきになったことでしょう。山岳地帯で、川が流れている、という風景は同じですし、そこで serranas が踊る、という出来事も同じです。古

典神話のニンフをひきあいに出すのも共通ですし、スレートを打ち合わせるテホレタスという民俗楽器も両方に登場します。

興味深いことは、このような共通する内容を記述するために、しばしば同一の表現が用いられていることです。*Soledades* でロマンセと同一もしくは類似した表現のある箇所を以下に抜き出します。

rémora de sus pasos fue su oído,
dulcemente impedido
de canoro instrumento, que pulsado
una serrana junto a un tronco,
sobre un arroyo de quejarse ronco,
mudo [1] sus ondas, cuando no enfrenado. [1]
[・・・・・・・・中略・・・　　]
Negras pizarras entre blancos dedos [2]
ingenïoso hiere [2] otra, que dudo
que aun los peñascos la escuchara quedos.
Al son [3] pues deste rudo
sonoro instrumento,
lasciva el movimiento [4]
mas los ojos honesta, [4]
altera otra bailando [3] la floresta.
[・・・中略・・・]
El Sileno buscaba
de aquellas que la sierra dio Bacantes,
ya que Ninfas las niega ser errantes [5]
el hombro sin aljaba, [5]
o si, [・・・・・・
・・・中略・・・]
escuadrón de Amazonas desarmado,
tremola en sus riberas
pacíficas banderas.

囲み線で示したのがロマンセとの共通箇所です。ロマンセにも同様に囲み線を入れて、対応する箇所を同一番号で示してありました。

次に、個々の箇所の同異について示します。

① 「沈黙させる mudo(enmudecer)」と「止める enfrenado(enfrenar)」の組み合わせ（S 242, R 41,42）[12]。Sでは「(娘が弦楽器を爪弾くとき) 川がその波を、止めないときは沈黙させて」Rでは「象牙の楽器が、鳥を沈黙させ、水の流れを止めた」。Rで使われている打楽器がSでは弦楽器になり、Rに登場する鳥がSにはない。

＊Sでは、打楽器と鳥が後で登場することに注意。

② herir negras pizarras entre blancos dedos(S 251-252, R 37-38)
娘が打楽器を打つのに、まったく同じ表現が用いられている。

③ bailar al son de(S 254, R 2-4)
Serrana(s)が「～の音にあわせて踊る」という表現は同一だが、Sでは打楽器の音に合わせて踊るのに対し、Rでは水の音、風の音に合わせて踊る。

＊水の音、風の音は、S348-349で、打楽器を聞くために静まることに注意。

④ movimientoと honesto(honestamente)の組み合わせ(S 256-257, R31-32)。ただしRでは動きが慎み深いのに対し、Sでは慎みは目にあり、動きは淫ら。Rには「淫ら」という表現はない。

＊二つの作品における女性の描き方の変化に注意。

⑤ ディアナに従うニンフたち（S 273-274, R 7-8)。
両方に出てくるが、Rでは直截に、Sでは迂言法により表現。

(2)(335～349行)は、ダマソ・アロンソが1935年版の註でふれた[13]のを除けば、クエンカのロマンセとの関係があまり論じられることの

---

[11] Luis de Góngora, *Soledades*, edición de Robert Jammes, Madrid, Castalia, 1994.
[12] Sは Soledades, Rはロマンセ、数字は行数を示す。
[13] Don Luis de Góngora, *Obras mayores 1, Las soledades*, nuevamente publicadas por Dámaso Alonso, Madrid, Ediciones del Arbol, 1935, pp. 286-289.

ない箇所です。Serranasの描写もありません。しかし、言及されていなくても、この場面に serranas は存在しております。ロマンセとのテキスト上の関連もあります。

(1)で見た娘たちの乱舞の場面のあと、50 行ほど、男たちが運んでくるお祝いの品の描写が入ります。次々にいろいろな動物が出てくるばかりでストーリーとのつながりが見え難くなるのですが、娘たちが踊っていた場所に、今度は男たちが次々に到着する様子を、持ち物を順に描写して示しているわけです。

(2)ではまず、見えにくくなったストーリーに話を戻します。どうして、女たちが先に到着し、人目をはばからずに騒いでいられたのかというと。彼らが辿ってきた道は、途中で二本に別れた。傾斜の緩やかな本道（弓の弧）と急な近道（弓の弦)。娘たちは近道を通って本道を下りてくる若者たちを待ち構えた。男たちはここで荷を下ろして、休憩をとることにするが、あまりの静けさについ眠ってしまう。かつて猛り狂っていた小川が今は穏やかに、音をたてずに流れるから。

怒っていた小川が優しくなったのはなぜか、というと。

merced de la hermosura que ha hospedado,
345 efectos si no dulces del concento
que, en las lucientes de marfil clavijas,[6]
las duras cuerdas de las negras guijas
hicieron a su curso acelerado,[7]
en cuanto a su furor perdonó el viento.[8]

そこに美しい女性たち serranas がいるから、音楽の効果でないとすれば。問題はこの音楽で、345 行から 349 行にかけての部分にはさまざまな解釈があり、まだ解決がついていません。

「象牙の糸止めにとめた黒い小石の硬い絃 en las lucientes de marfil clavijas,/ las duras cuerdas de las negras guijas」をめぐって、17 世紀から二つの解釈がありました。Salcedo Coronel は「川の波（水）を楽器に、川底の小石をヴァイオリンの弓の糸にたとえた」としましたが、「象牙の糸止め」が何かは説明していません。Pellicer

は「娘の指に握られた小石」といいます。ダマソ・アロンソは、はじめ、「川底の小石が急な川の流れとぶつかって音楽を奏でる」そして「象牙の糸止めは川岸にいる娘たちの手足で、川底に一列に並ぶ小石をそれに止められた弦に見立てた」という説明をいたしましたが、このイメージはかなり無理がございます。その後、クエンカのロマンセの「象牙の楽器」を根拠に、tejoretas である、と修正いたしました。しかし、その註では（pp. 289-291）、小石 guija をスレートととることに深い難色を示します。ゴンゴラの他の作品に、川底の小石 guijas に水があたって音楽を奏でる、という表現が複数あり、guijas は例外なく川底の小石であると指摘しております。しかも、お終いには、結局、修正が正しかったのかどうか迷っている、前の解釈のほうがよかったかもしれない、と言い出す始末です。最近では、R. Jammes が小石の問題を重視して、川の水が小石でつくられた堰にあたって奏でる音楽という新説を出しました。象牙の糸止めは堰のそばの岸に生えている木にぶつかって上がる水しぶきである、と説明します。しかも、堰はここからやや離れた、上流にある。上流の水音を聞くために、ここで、小川は静かになっている、と。この解釈の難点は、小石 guijas の問題を解決するいっぽうで、自然（川）が自分の音をきくために静かになる、というおかしな理屈を主張するところです。古典以来、人の奏でる音楽を聞くために自然が自然本来の音をたてるのをやめる、というのが音楽の美しさを強調するおきまりのレトリックで、ゴンゴラの作品でもそうです。

私の考えでは、ここは Pellicer の、そしてダマソ・アロンソの２番目の解釈でただしいと思います。根拠はやはりクエンカのロマンセです。具体的な共通部分を見てみましょう。

⑥ S　las duras cuerdas de las negras guijas en las lucientes clavijas de marfil (346-347)

R　negras pizarras entre blancos dedos, instrumento de marfil (37-39)

共通しているのは negras と marfil の２語です。ただし R の negras を含む部分（negras pizarras entre blancos dedos）は、完全に同一の形で別の箇所（②）に使われています。

R の instrumento de marfil は、楽器といいますから音を出すもの全体、指と指に握られたスレートを一体と考えています。S の clavijas de marfil は指だけを指します。

楽器 tejoretas を、この言葉を避けて表現するためには、なんらかの形で石と指に言及せざるをえない。negras pizarras entre blancos dedos がもっともクリアな言い換えですが、これは一度使ったので同じ表現はできない。

もう一度 tejoretas を出す必要が生じて、pizarras を guijas に、entre blancos dedos を en clavijas de marfil に言い換えた、と考えられます。dedos＝marfil の発想はすでにロマンセにあるからです。

さらに、共通の発想があります。

⑦S　efectos...que...hicienron a su curso acelerado (345, 348)

　R　enfrenó el curso del agua (42)

R は、「(象牙の楽器が) 水の流れを止めた」といい S は「(小川がいま静かなのは象牙の糸巻きに止めた小石の弦が) 急流にあたえた効果である」といいますが、これは同じことを言っているにすぎません。enfrenar は mudo とのコンビで、すでに S のなかで使用済み (①) であったために、この部分を別の表現に変えました。

⑧S　en cuanto a su furor perdonó el viento (349)

　R　no se movieron las ojas (43)

S では、「風が (小川を) その怒りから免除するあいだ (は小川は静まっている)」。R では、「(歌を聴くために) 木の葉は動かなかった」一見ちがうことを言っているようですが、木の葉が動かないのは風が吹かないからです。風が吹かないことによって、serranas の音楽 (歌) を聞くための静けさを作り出すという同一の発想です。

ロマンセとの共通点が、「象牙の楽器」「象牙の糸止め」だけでなく、川が水音をたてない、風が吹かないことによって静けさが生まれるというところにもあることがわかります。

テキスト(345～349 行)が言っているのは、この本道と近道の合流す

る場所では、小川はとても静かに流れていた、ということなのです。静かな理由のひとつに、今の状況（美しい serranas が川岸に憩っている）だけでなく、男たちが姿を見せないときに響いていた音楽の効果もあげる。これは、女たちだけが騒いでいた、そして主人公が木の洞にかくれて見ていた、最初の場面に読者を連れ戻す必要があるからです。このあと主人公が姿をあらわす場面が続きます。そのために、はじめに描写した楽器のことを、もう一度くりかえす必要が生じました。川が静かに流れている、というのも、(1)の最初のところで言われていたことです。

第３の部分(540～561行)に移ります。

前の場面が終わってから、なんと200行もあとのことです。この200行では、主人公が山の人々の前に姿をあらわし、その衣服に海難のあとを認めた老人が（娘たちに付き添っていると、あとで分かります。さきほど娘たちだけでさわいでいたのは、どうやら、急斜面をくだるところで置いていかれたのですね）大航海事業にたいする長い批判を述べます。そのあと、休憩を終えた一行が婚礼のおこなわれる村をめざして、ふたたび歩き始める。その道中の描写です。

娘たちは歌い、踊りながら川沿いの道を進んで行きます。娘たちが踊るとスカートがゆれる。スカートがゆれると、脚が見える。編み上げ靴の紐の間に、白い素肌がのぞく。川の水はゆっくりと流れているから、水面には、岸辺にそって生える楡の木の間に見える、娘たちの白い脚が映っている。娘たちの合唱はセイレンのように見事で、鳥もそれを聞きに集まる。小川は、よく聴き取るために、白い泡で沢山の（小川が洗う小石の数だけの）耳をつくる。

Coros tejiendo,[9] voces alternando,
sigue la dulce escuadra montañesa
del perezoso arroyo el paso lento,
en cuanto él hurta blando
(entre los olmos que robustos besa)
pedazos de[10] cristal, que el movimiento
libra en la falda,[10] en el coturno ella,

de la coluna [11] bella
ya que celosa basa,[11]
dispensadora del cristal [11] no escasa.
[・・・中略・・・]
Pintadas aves,[12] cítaras de pluma,
coronaban la bárbara capilla,
mientras el arroyuelo para oílla [12]
hace de blanca espuma
600 tantas orejas cuantas guijas lava,
de donde es fuente a donde arroyo acaba.

ロマンセにあった、スカートの裾から脚の素肌が見える描写との類似で非常に有名な部分ですが、共通なのはそれだけではありません。

⑨ S Corros tejiendo y voces alternando(540)
R Alegres corros tejían (13)
corro はこの場合、コーラスではなく、人の集団、舞踊の組です。二つの集団が一つになったり別れたり、という動きを、機が織物を織る動きのようだと描写しているわけです。*Soledades* のここの部分の踊りが、クエンカのものと同種であることがわかります。

⑩ S pedazos de cristal, que el movimiento libra en la falda, ella en el coturno(545-546)
R El pie, cuando lo permite la brújula de la falda, calza lazos y deja mirar pedazos de nieve y nácar (27-30)
「スカート」「編み上げサンダル」「素肌」への言及は共通なのですが、微妙な違いがあります。素肌は、S の pedazos de cristal は脚（ふくらはぎ）ですが、R の pedazos de nieve y nácar は足です。「見える」ことを表現するのにも違いがあります。R では「スカートの覗き穴」（揺れる裾の間）が許可すれば、紐のあいだから素肌が見える。S では、動きがスカートのなかに素肌を解放し、スカートは靴に解放する、と 2 段階になります。スカートが揺れて素肌がみえるというのは同じなのに、なぜ S ではややこしい言い方

をするのかというと、librarには「解放する」のほかに「手形を振り出す」という意味もあるので、言葉遊びを思いついたのです。

⑪ S ya que celosa basa de la coluna bella, dispensadora no escasa del cristal (546-548)

R cuyo(de serranas) movimiento ...levanta el cristal de la columna sobre la pequeña basa (31-34)

足が柱基、脚が柱、白い脚の肌を水晶、と表現するのは両者に共通ですが、Rでは、踊りの動きが脚を（慎み深く）見せるのに対し、Sでは「素肌を靴に解放する」ことの説明です。靴は脚（美しい柱）の柱基の部分にあたり、サンダルだから、編み目を格子窓 celosía に見立てて celoso 嫉妬深い、と掛け、しかしふくらはぎまで編み上げになっているので（靴はふくらはぎまで続いているので）、豊かな素肌（水晶の破片）の所有者である。たくさん持っているから「水晶」を「振り出す」ことができる、と手形の言葉遊びがつづきます。

Soledades にはロマンセになかったものが二つあります。ひとつは素肌が水面に映っていること。水面は人の目の位置より低いので、目には見えないところまで映し出していることになる。よりエロティックです。もう一つ加えられたのは手形の言葉遊びです。金融という、色っぽさとは対極にある要素を、思いきって色っぽい描写に組み合わせております。

ところで、スカートがゆれてサンダルの間の素肌が見えるというモティーフをゴンゴラはロマンセに先立って用いております。Corcilla temerosa ではじまる 1582 年の canción です[14]。

El viento delicado
hace de sus cabellos
mil crespos nudos por la blanca espalda
y habiéndose abrigado
lascivamente en ellos,

[14] Luis de Góngora, *Obras completas*, edición Millé, p. 567.

a luchar baja un poco con la falda,
　donde no sin decoro,
　por brújula, aunque breve,
　muestra la blanca nieve,
entre los lazos del coturno de oro;
　y así, en tantos enojos,
si trabajan los pies, gozan los ojos.

風がふいて、女性の白い背中に、髪で無数のちじれた結び目（輪）をつくる。風は淫らに、その結び目の中に隠れ、そのあとスカートと戦いに（背中から下のほうへ）下りる。そして、そこで、ほんとうにわずかにだが、黄金のサンダルの紐のあいだにある白い雪を、ちらりと見せる(mostrar por)。crespos nudos と brújula というロマンセと共通の表現が存在します。

ゴンゴラがひとつのモティーフを 10 年単位で育て変形させながら完成していったことがわかります。

さて、最後の共通要素です。

⑫S　aves...coronaban la bárbara capilla; el arroyuelo ...hace... tantas orejas (556-559)

R　las aves enmudeció y enfrenó el curso del agua　(41-42)

S では娘たちの歌声に対する鳥と小川の反応、R では打楽器の演奏にたいする鳥と小川の反応です。enmudecer/enfrenar の部分は S ではすでに、弦楽器への反応として使用済みであることから、鳥と水の流れの組み合わせは用いるが、反応のしかたを変えました。歌を聴くために、鳥は娘たちの頭上にあつまり、流れは（川底の小石にぶつかってできる）泡でたくさんの耳をつくる

結論

以上、*Soledades* の 237 行から 601 行にかけて（途中 2 度の中断はありますが）serranas が登場している場面で、クエンカのロマンセの前半部分が元になっていると思われる表現が 12 箇所存在することを見てまいりました。237 行から 601 行というのは、*Soledades* 第一部

全体の3分の1にあたります。さらに今回は触れませんが、三日目、婚礼の食事のあとで祝婚歌にあわせて踊る娘たちの描写に、クエンカの娘のヘアスタイルと同様のものがでてまいります（886-887 行）。*Soledades* は、第一部に限ってみても単純な牧歌ではない、さまざまな要素をもつ作品ですが、その主要な要素のひとつを、クエンカの娘たちのロマンセが構成していることは間違いありません。

12 箇所について、ロマンセのテキストが Soledades のテキストになっていくプロセスをまとめてみましょう。

1）ロマンセの踊りと音楽（楽器と歌）に関する記述が、ほぼ全面的に、*Soledades* の3つの部分にわけて使用される。

2）音楽についての記述はすべて、娘たちの奏でる楽器や歌に自然が反応するという、同一のモティーフによる。

ロマンセ		*Soledades*	
音楽	自然	音楽	自然
		弦楽器	川
打楽器	川と鳥	打楽器（1回目）	木と岩（踊る）
		打楽器（2回目）	川と風
歌	木の葉（＝風）	歌	鳥 川（耳を作る）

注）自然の反応は（ ）で示したもの以外は沈黙である。

Soledades では弦楽器が加わり、打楽器は二度言及されることから、ロマンセに存在する自然の反応を繰り返すだけでは足りなくなり、新たな要素と大胆な誇張（木が動く、岩が踊る）が導入される。川についても、二度目の使用では「水がたくさんの耳をつくる」という極めて独創的な表現が行なわれる。

3）ロマンセの踊りの描写の緒要素が *Soledades* の2種類の踊りに振り分けられる。

	踊りのタイプ	異性の目	神話	素肌の描写	慎み
ロマンセ	組踊り	有	ネレイダス ディアナの従者	有	○
Soledades ①	乱舞	無	バッカイ ディアナの従者 アマゾネス	無	動き× （淫ら） 目　○
Soledades ②	組踊り	有		有	

クエンカの娘たちの踊りは②と同一である。神話の女性たちは、ロマンセでは女性的美徳を共有するのに対し、*Soledades* では男性への不服従を共有する。素肌の描写は *Soledades* においてエロティック度を増す一方で、金融という異質な言葉遊びを取り入れる。

以上のようなプロセスを経て、*Soledades* はクエンカのロマンセのすべての要素を丹念に織り込みながら、ロマンセとはまったく異質の、はるかに複雑で難解な作品になっているのです。

Soledades がどうして複雑・難解になっていくかという理由のひとつは、ロマンセの発想をより広範に展開させていこうとするからです。ロマンセを主題として用い、それに様々な変奏を加えて大曲に仕上げているわけです。私たちは変奏を聞いているうちに主題の旋律を忘れてしまうということがあります。読者に元テキストの存在がわからなくなってしまう。(2)の場合がそうでした。同一の表現を避けようとする作者の意思が、もとの表現を一ひねりさせるため、もとを意識していないと意味がわからなくなる、本歌取りの本歌がわからない状態というわけです。

もうひとつの理由は、作者の詩と人生の成熟です。娘たちの素肌の見え方はロマンセでも *Soledades* でも変わりはないのに、後者の描写が格段に複雑になるのは、言葉遊びによる金融のジョークを組み合わせるからです。エロティックは伝統的で優雅な詩のテーマです。これに、金融という庶民的で散文的な世界を重ねるのです。

伝統的な詩の世界に、散文的な世界を持ち込む。厳粛な話題に、おもいきって卑俗な駄洒落を加える。古典の理想美とリアリズム、高雅

と卑俗、涙と笑いが交互に顔を出すのが *Soledades* の特徴です。これは伝統的な詩学に準拠する当時の批評家たちを困惑させました。長編詩という高踏的な文学に真面目に向き合う読者をからかうように乱発される駄洒落は、人びとの神経を逆撫でにしたのです。

どうしてそんなことをしたのかといえば、彼には人生の現実がそのように見えていたからです。現実は古典詩学にしたがって整然と分類できるような一面的なものではないと、50歳になったゴンゴラには思われたのでした。

女性のとらえ方にもそのような認識の変化が見られます。ロマンセの serranas は家庭的な処女で、慎み深く踊り、伝統的な規範に沿っています。*Soledades* では、彼女らの振舞いは異性の視線の有無で違ってきます。人目がないところで淫らな乱舞をくりひろげる彼女らは、バッカイやアマゾネスという男性の制御をうけつけない神話の女性像に擬えられます。ロマンセにもでてきたディアナのニンフは男性に不服従な処女なので、二面的な存在です。乱舞する娘たちは、淫らでもあれば慎ましさも持つ、二面的な処女として捉えられています。

女性に対する複合的な、現実的な認識と、女性の自由な振舞いに対する好意的な視線は、別の箇所で見られる女性の性欲や強い女性に対する肯定的な視線に通じるものです[15]。ゴンゴラがフェミニストであったと主張したいわけではありません。申し上げたいのは、彼の女性に対する見方が伝統に囚われていない、ということでございます。

1603 年から 10 年を経て、ゴンゴラのなかで深まっていったのは、これまでの、決まりきったものを捨てるという考えでした。これが作品の新しさの根底にあったもの、そして読者を苛立たせたものだったのです。芸術は自然の模倣である。ルネッサンスから受継いだこの永遠普遍の真理をゴンゴラは忠実に実行しようとした。現実の模倣は古典の規範を破壊することを、彼は意識したのでした。バロックの誕生です。

Soledades の新しさはここにありました。表現の新しさだけに着目

---

[15] Saiko Yoshida, "Las hijas del pescador. Hacia el concepto de la mujer en la *Soledad segunda* de Góngora", *El hispanismo al final del milenio*, Asociación Argentina de Hispanistas, Córdoba, Córdoba, Comunicarte Editorial, 1999, pp. 607-614.

することは、この本質から目をそらすことになる。ゴンゴラの作品を理解することは、表現ではなく内容を、レトリックではなく思想を、理解することであると申し上げて、本日のお話しを終わらせていただきます。[16]

---

16 本稿は第3回「アルゼンチン・スペイン黄金世紀文学会議」(1997年ブエノスアイレス)における発表論文 "Las serranas de Cuenca y las serranas de la *Soledad Primera* -en busca del concepto de la mujer en las *Soledades*-" (*Lecturas críticas de textos hispánicos. Estudios de literatura española Siglo de Oro vol.2*, Buenos Aires, Editorial Universidad de Buenos Aires, pp.353-362) でおこなった検証を基に、あらたに執筆した。

中世今帰仁のハスいわゆる卍紋を考える

上間　篤

はじめに

ハスとは，鉤十字の紋様を指す，モンゴル語に固有の言葉である。一方，西欧の諸言語では，スペイン語のスバスティカなどがそれに相当し，語源に限定するならば，それはインドの宗教文化とかかわっていることが分かる。ところで日本人はハスをマンジと呼び習わしているが，その起源が語源の上でも西欧のそれとは無縁のものであることは，その独特の響きからも明らかである。そもそもマンジとは，モンゴル王朝下の中国で江南4省（江浙行省，福建行省，湖広行省，江西行省）をひっくるめて呼ぶ総称であった。モンゴル王朝に関する先行研究を参照すれば，元朝期には無名の僧侶たちが日本から中国へ盛んに渡航していたことが分かる[1]。従って現代日本語に現存するこのマンジ（蛮子）なる特異な語彙は，かかる元朝期の中国と中世日本との関係を紐解く鍵ともなろう。面白いことに今帰仁城跡から出土した14世紀頃の品目には，まさにハス（卍）の紋様を施した白磁碗なども含まれている。今回は，ハスに霊的な呪術力を求めた騎馬遊牧民に特有の風習なども参照し，今帰仁城跡から出土した卍紋の氏素姓について考えてみる。

ハスとその原郷

ハスいわゆるマンジには，右回転のかたちと左回転のそれとがあり，モンゴルの伝統的な解釈に従えば，前者は男性，後者は女性を象徴する。その場合，右回転の紋様はハス・ブー，左回転のそれは単にハスと呼ばれる。一方ハスは，モンゴル語で［対］を表す言葉でもある。それを裏付けるかのように，ブリヤート族の女性たちが

[1] 北川誠一・杉山正明　『世界の歴史9 大モンゴルの時代』　p. 281.

身につけた装飾品には，左右に各々左回転と右回転のハスをあしらったネックレスなどが散見される。ちなみに右回転のハスは，かつてドイツのナチ党の紋章に採用された経緯などもあり，昨今では，時にそれを嫌悪したり，またそれに対して忌避の心情を露にする社会的風潮などもみられる。それはさておき，ハスをめぐる上述の内容を鑑みれば，モンゴル語においてハスなるものが一種独特の地位を占めていることは明らかである。

さて，卍紋はキリスト教世界においても十字架の一つとして公式に認知されているが，それが認知されるに至った経緯については，教会史などを参照してみても今一つ判然としない。一方，日本の国史大辞典などは，卍紋の出自をインドに求める[2]。ところが，20世紀に入りモンゴルで発見された石器時代の洞窟壁画などを参照すれば，かかるインド起源説は立ち所に色あせてしまう。問題の壁画は，モンゴル西部のホブドゥ県やその北隣りのウブス県などで発見された。前者は旧石器時代に溯るものとされ，洞窟の壁に描かれた数多くの絵文字の中にハスの紋様がはっきりと確認される[3]。また後者は新石器時代のものとされ，それには中央の複雑な絵文字の両脇にハス・ブーとハスとが対として描かれている[4]。ホブドゥ壁画に少しく付言するならば，描かれた複雑な絵文字の体系には，人類に芽生えた数の概念を見て取ることもできる。絵文字の個体数がきちんと百体のまとまりを示すあたりは，ハスの根源的意味を形而上学的手法で解き明かそうとする試みにも一石を投じそうな気配である。それはともあれ，かかる考古学上の発見は，ハスの起源が石器時代に溯ることを立証するものであり，その学問上の価値は計り知れない。

ハスと呪い

ハスに霊的な力を求める信仰がユーラシア大陸の様々な遊牧民に

---

[2]『国史大辞典』　第13巻　p. 228.
[3] バーサンスフ，ヤ・ベ　『ハスの発祥地は何処』　p. 6.
[4] 同書　p. 7.

流伝して行った経緯は複雑な様相を呈するが，4世紀中葉の頃までコーカサス平原で遊牧生活を営んでいたアラン族（イラン系遊牧民）などには，古くからハスを崇める信仰が根付いていたことが分かる。やがてこのハス崇拝は，彼らと後続のフン族（アッチラに代表されるトルコ系遊牧民）などの西進（370年以降）に伴い，西方のヨーロッパにも伝わる。ローマ帝国終焉期にローマ帝国内で活躍したアラン族について記したバクラクは，自著の『アランの歴史』の中に，後脚の付け根に右回転のハス紋を印した犬の絵を紹介しているが，著者によれば，それはアキタニア（南仏）のアランの遺跡で発見されたものであるらしい[5]。問題のハスが何を表象するものであったのかは祭祀や埋葬儀礼の見地から重要であると認識されるが，当のバクラクにもそれは正体不明のものであったらしい。ただしハスを印したこの犬がコーカサスあたりの種を写したものであったことは容易に想像される。なんとなれば，4世紀の後半期にコーカサスを出て西進したアラン族は，背中に人を乗せて一日に百数十キロも疾走したといわれる駢馬に跨がり，彼らが猪狩りに訓練した犬や家畜を伴いヨーロッパに現れたと伝えられる。新天地のヨーロッパでは，これら新来の馬や犬にいたっても，主人の種族名にちなんでアランと呼ばれたという。ちなみにバクラクによれば，今日英国の貴族達が馬上から犬を追い立てて獲物を仕留める狩りの手法などは，古くにアラン族が騎乗から犬をけしかけて行った猪狩りに由来するものであるらしい。

ところで，スペイン人で，考古学資料を図柄に収める仕事を専門にするアルベルト・アルバレス・ペーニャは，ハスの呪術的側面について，自著の『呪術と伝統に見る象徴』の中で示唆に富む見解を述べている。同著において著者は，北オセチア・アラニア共和国[6]で行われるしきたりの一例に触れ，主婦がパン生地にスプーンやフォ

[5] Bachrach S., Bernard, *A History of the Alans in the West*, p.113.
[6] 今日アラン族の後裔の人々が暮らす国。ロシア連邦に属する共和国の一つ。この国で最近テロリストの集団が学校を占拠し，多くの子供達が犠牲になった事件は記憶に新しい。

ークなどでハスを印す風習を紹介している[7]。それに類似するものとして著者は，スペイン北部のアストゥリアス地方に伝わる古くからの風習の一つに，作り立てのチーズやバターの表面に六弁紋あるいは八弁紋の花紋を押し当てる習わしがあることを引き合いに出し，カフカズ地方に伝わる風習といったものが，大切な食物を邪気から守ろうとする呪いの一種であることを解き明かす。ちなみにスペイン北部のアストゥリアス地方で，乳製品に花紋を押す邪気払いの伝統といったものは，その由来を辿れば，古代のロゼッタ信仰（ロゼッタは太陽を象徴する）にたどり着くものであるらしい。

一方，考察の視線を東方に移せば，ハスをめぐる北オセチアの事例を彷彿とさせる呪いの類いが，現今のモンゴルや中国でも行われていることが目に留まる。類似のものには，敷物用のフェルトの縁をハスの連結紋様で飾るモンゴルの装飾文化ならびに食器の内側の縁に同様の紋様をあしらう中国の伝統工芸といったものが上げられる。さらに時代を溯れば，元朝期には酒甕などにもハスを浮き彫りにする習わしがあったことが分かる[8]。これらの事例は，先のアキタニアの犬に描かれたハスの由来を解き明かす有力な手掛かりとなろう。ローマ帝国の終焉期にヨーロッパに現れたアラン族やフン族らは，邪気払いの一環として彼らの馬や犬などにハスの焼き印を押していたと見られる。この観点は，次に述べるハスと印章との関係を見れば，さらに明確なものとなろう。

ハスと印章と焼き印

ハスがモンゴルの遊牧民の間で印章として用いられるようになるのは西暦の7世紀頃とされるが，今後の考古学上の展開によっては，その歴史がさらに溯ることは十分に予想される。モンゴル王朝の名称を元と改めた五代皇帝クビライの治世下では，パスパ文字（この文字体系はクビライの命を受けてチベット仏教の僧侶パスパが考案

[7] Álvarez Peña, Alberto, *Simbología mágico – tradicional*, p.18.
[8] NHK取材班編　『大モンゴル3　大いなる都 巨大国家の遺産』　p. 40.

したのでそう呼ばれる）を彫った印章が元朝の公証印として採用される。このパスパ文字を彫った印章には，その上部の中央当たりにハスを配したものなどもある[9]。時代は下り17世紀を迎えると，モンゴルでは家畜に焼き印を施すことが行われるようになる。焼き印にはハスが選ばれた。その意図はハスをめぐる呪術性とのかかわりにおいて説き明かされよう。家畜は遊牧民にとって欠くべからざる生存のための命綱である。いうなれば彼らはこの命綱を死守せんがために，焼き印には呪術性に富むハスを選択したのだと考えられる。ただしこのような選択肢にかかわる事柄のみが焼き印の風習を生んだ要因ではなかったろう。この地域で焼き印の風習が芽生えるに至った背景には深刻な気候変動がかかわったものと憶測される。ユーラシア大陸の大草原地帯は時に猛烈な寒波に見舞われることがある。考えるに17世紀あるいはそれに先行する時代に，気温の冷却化を伴う深刻な気象変動がこの地域を襲ったものと推察される。かつて北半球では，北方の海域が広範囲に凍結するといった気象上の大異変を経験したことが伝えられ，当時英国北部などでは沿岸地方の住民が，氷上を犬橇に乗って南下して来たイヌイットの人々と出くわすこともあったという。北半球に起こったるかかる気象上の大異変は16世紀あるいは17世紀頃のことではなかったろうか。英国とモンゴルは共に北半球の高緯度に位置する地理的条件を満たしていることから，英国の北辺に連なる北海が凍結した頃の気象条件が，モンゴルの大草原地帯の気象一般に影響を及ぼさなかったはずはない。近年大寒波に見舞われたモンゴルで多くの家畜が凍死したことは記憶に新しい。17世紀のモンゴルに登場する焼き印の風習は，どうやらその頃に人類が経験した地球規模の未曾有の冷却化現象とかかわるものであったと見てよさそうである。モンゴルの遊牧民は，辛うじて大寒波を生き抜いた家畜を愛しみ，大切な命綱の健やかな成長と安寧を祈願してハスの焼き印を施すようになったのだと解釈される。

[9] バーサンスフ，ヤ・ベ　前掲書　p. 10.

また当時の焼き印には，ハスの下部に三日月を配したものなどもあり注目される。人類が三日月を崇めて来た歴史は古代のバビロニアに源を発するといわれるが，紀元前にイベリア半島などで行われた三日月を崇める信仰は，古代のフェニキア社会から流伝したものであったらしい[10]。古代のフェニキアでは，三日月は幼子を病気や悪霊から守る守護神として崇められ，その力は母性に宿る霊力に求められた。三日月と母性とが見事に組合わさったフェニキア流の守護神像には，月の満ち欠けと女性に特有の月々の生理現象とがうまく融合しあっていて小気味よい。またこのフェニキア的女性崇拝に見る内面的装いは，スペインのエルチェで発掘された女神像（胸像の裏側には被葬者の灰を安置するくぼみが彫られている）の宗教的色合いにも通ずる特徴を帯びていて面白い。ここでかさねてモンゴルの三日月紋に戻るが，それが焼き印の一部を構成していることを鑑みれば，17世紀のモンゴルでも三日月を奉る信仰が行われていたことを示唆しよう。それを証明するかのように，モンゴルを象徴する図柄には，亀・ハス・太陽・鷲などと共に，三日月もきちんと描かれている。

さてここまでは主に遊牧民を起源とするハスをめぐり，その呪術的側面に則してその展開のありさまをいろいろと考察してきた。中でもとりわけカフカズの例で明らかとなったハスと邪気払いとの関係やユーラシア大陸東部の遊牧社会で印章に霊力を付与する方策としてハスが選ばれた経緯などは，今帰仁城跡から出土した卍紋の用途を解明するための有力な手掛かりになると期待される。

今帰仁の凸面状卍紋

今帰仁城跡は，日本の通史でいえば，鎌倉・室町時代にあたる城跡であるが，この中世の城郭跡からこれまでに合計七体の十字架紋が出土しており，それらの内の二体は卍紋が占める。これらの卍紋

[10] Álvarez Peña, *op.cit.*, p. 195.

以外の十字架は，縦横の軸がいずれも同じ長さからなる，いわゆるギリシャ正教のそれに類似する特徴を示す。さてこれから問題にする卍紋は，口径が13.3cm，器高が4.5cmの白磁碗の内底に施されているもので，それは凸面状のスタンプに見立てることが出来よう。考察に先立ち凸面状卍紋の年代を明らかにしておく必要があるが，この卍紋を施した白磁碗が14世紀の器であることが判明していることから，卍紋も同時代のものと推定される。では往時の今帰仁郭内の文化なるものがいったい卍紋とどのようなかかわりを見せるものであるのかを検証してみよう。

14世紀の後半期に今帰仁城に君臨した武人集団は，不思議にも米よりも麦を愛でる食文化を好む人々であったらしいことが，出土した麦粒や回転式石臼の事例から想定される。これは，一見日本に根付いた伝統的な稲作文化の視点から見れば，何分にも説明の施しようのない不可解な文化現象である。加えてこの地域は，稲作伝来とのかかわりで，中国江南地域との古くからの結び付きが指摘されて来た場所である。かかる文化的土壌の真っ只中から突如として麦と麦文化圏が生んだ偉大な傑作といわれる左回転式の石臼ならびにギリシャ正教との繋がりを彷彿とさせる十字架の数々が姿を現すのである。このような三点セットが稲作文化とは一線を画す文化的要素であることは自明のことである。加えてこの地域で山羊の肉が食されるようになるのも14世紀の後半期からのことである。羊や山羊の肉を豚肉よりも愛でる文化は中国江南地方の稲作地帯では絶対にあり得ないことである。沖縄では今日でも山羊肉の方が豚肉よりも文化的には高い地位にあることは，家屋の建築に伴う棟上げ式を祝う料理の品揃えなどを見れば一目瞭然である。ところで発掘資料で得られた他の考古学資料はどうかといえば，こちらの方でも軍装備を筆頭に麦文化圏とのかかわりが指摘される品々のオンパレードが続く。

まず軍装備では，鑿状鏃，携帯用石製ヤスリ，錐などがとりわけ注目される。これらの出土品の特徴を少しく拾ってみると，鑿状鏃

は騎馬遊牧民に特有のもので，実戦用として殺傷能力に勝れ，その歴史は古い。この鑿状鏃と鎌倉・室町期の日本の鏃とを比較すれば一目瞭然だが，両者に共通するものなどは何一つない。また携帯用ヤスリと錐はいわくつきのもので，ドーソンによれば，かつてモンゴル軍の軍団内では，ふるい，縫い針，糸，携帯用ヤスリ，錐などを常備していない兵士は厳しく罰せられたという[11]。

その他のものとしては，紡錘車や鉄製のハサミなどといった遊牧民には不可欠の生産用具が注目される。紡錘車は羊毛などを糸に縒る仕掛けの一部であるが，これが存在することによってハサミの用途が大方判明する。元来このハサミは，羊毛などを刈るために製作されたものであったろう。またこのハサミの出来栄えには制作者のみごとな匠の技が冴える。ちなみにモンゴルの首都ウランバートルにある国立歴史博物館には，今帰仁のハサミと瓜二つの品が保管されており，両者の氏素姓が極めて気になるところである。

女性の装身具についても，上述の例に違わず，西域とのかかわりが指摘される。これから紹介するものは，この道の研究者にはたまらなく魅力のあるものである。それは漢字で，顧姑，固姑，罟罟などと表記されるものだが，それらは各々クコと読む[12]。クコとはモンゴル語で飾りを意味する言葉であるとされるが，一般にそれは遊牧民の女性たちに尊ばれた頭飾りをいう。その歴史は紀元前のスキタイの時代にまで溯る由緒あるものである。クコは通常頭のてっぺんに円形の筒上のものを固定し，それに様々な装飾をあしらうものである。このクコに用いられたと判断される円筒状の鉄製品が，鏡の破片，鉄製の毛抜き，その他の装身具類に交じって出土している。クコは種族を問わず広くユーラシア大陸の遊牧民に流伝した風習であったことから，ただちにそれだけを根拠に特定の民族とのかかわりを論じるわけには行かない。ところが幸いにも，次に紹介する金属製の円環状耳飾り（イヤリング）は，問題の解決に糸口を与えるも

[11] ドーソン 『モンゴル帝国史 2』 p. 34.
[12] 江上波夫・佐原 眞 『騎馬民族は来た!?来ない?!』 p. 237.

のとして注目される。広く装身具に関する歴史を世界に求めれば，円環状の耳飾りが女性にもてはやされるようになるのはイランのササーン朝・ペルシャの時代であることが分かる。以後このファッションはペルシャ女性を象徴するものとして広く世界に流布する。装身具に関するこれらの事柄を参照すれば，往年の今帰仁の勢力を束ねた領袖・攀安知の正妻は，ペルシャ伝来の装身具を身にまとったイラン系の女性であったことが想起されよう。沖縄では美しい女性を今帰仁ウカミと呼んで褒めたたえる。この尊称が古くは攀安知に仕えたイラン系女性たちに由来するのであったことは間違いなかろう。

郭内の人々とイラン文化との関係はなおも続く。次に両者を繋ぐものにはサイコロがある。城郭からはサイコロと円形状の小さな石の駒が出土している。それらの存在は，郭内の武人たちがナルドの遊びを知っていたことのまぎれもない証拠である。ナルドが考案されたのも，先の円環状耳飾りと同様に，ペルシャのササーン朝時代に溯る。ナルドはインドのチェスに対抗してササーン朝に仕えた宮廷侍医・ブズルグミフルが考案したものと伝えられ[13]，やがてそれは宮廷貴族の手を離れ，広くイラン系民族の庶民の遊びへと変身する。唐代にはそれが往時の中国の帝都・長安などを経てはるばる日本にも伝来する。ナルドのかかる流伝にはイラン系のソグド商人と日本から派遣された遣唐使たちがかかわったことはいうまでもない。日本では後白河法皇などもナルドの愛好者であったことが知られている。ナルドは双六（スゴロク）とも表記されるが，今日の絵双六の類いと混同してはならない。本来それは合戦を想定した机上の遊びで，チェスや将棋などと同様に，陣取りを競う遊びである。サイコロはナルドを打つ時に不可欠な道具の一つなのである。中世には，洋の東西を問わず，これらの陣取り遊びが武人たちにすこぶる人気を博した。以上考察を試みた出土品の品揃えを見れば，往年の今帰仁の

[13] 前嶋信次　『世界の歴史8　イスラム世界』　p. 48.

勢力なるものは，遥か西域のイラン系騎馬遊牧民と直接にかかわりのある人々であったことが判明する。

さて14世紀の元王朝に仕え，種族はイラン系でキリスト教を信奉したカフカズ出自の武人集団といえば，アラン族をおいて他には見当たらない。往時の中華系の人々は，モンゴル王朝に仕えて中華本土で活躍した様々の西域出自の民族を一くくりにして色目人と呼んだ。元朝末期に然る色目系人の集団が江南地方から東シナ海の大海原に乗り出して行った事件を伝える古文書がある。問題の古文書は明初に編纂された詩撰集の一つで，題名を『歸田詩話』という。この詩撰集の中の「梧竹軒」と題された段に，方氏一族に国外へ追放されたある色目人集団のことが語られている。方氏とは方国珍に代表される海賊集団・方氏一族である。方国珍は，韓山童，張士誠，朱元璋（明朝を興す人物）などと共に元軍に挑んだ反乱分子の領袖で，明史は「方国珍列伝」という項を設けてこの人物の働きを記している。さて問題となる『歸田詩話』の段には，浙江地方で方氏一族に追い詰められて四面楚歌の状況に陥った色目人らが，夜陰に乗じて梟のごとく東方へ落ち延びて行った様子が記されている[14]。元朝末期に方国珍らの迫害を逃れて東シナ海の大海原に脱出したこの色目系集団が，当時中華本土で五代目を迎えていたアラン（元史には阿速とも表記される）の武人集団の一派であったことは間違いなかろう。浙江省（元代には福建省も含む）から海原を隔てた真東には沖縄がある。

さて今帰仁とカフカズとがかかる関係にあることが明らかとなったところで，問題の凸状卍紋について考えて見る。すでに検証したように，郭内の武人集団は麦の文化を愛でる人々であった。この集団の来歴については先に少しく触れた通りだが，彼らは新天地の今帰仁においても，彼らに特有の騎馬民族としての勇猛果敢な尚武的精神を失ってはいなかった。郭内の食生活を特徴づける麦の文化も彼

[14] 瞿佑 撰 『歸田詩話』 歸田詩話 下 p. 18.

らのかかる精神風土を抜きにしては語れまい。彼らは稲作文化の真っ只中にあっても，日常的には西域の食習慣に習い，ナンの類いを常食にしていたと考えられる。麦と石臼の存在はその証しと見なされよう。ナンを焼くには麦粉をこねた生地が必要である。こね上げたばかりの生地は柔らかい。それを問題の凸状卍紋を施した碗に押し当てれば，生地にはおのずと凹状卍紋が写し出されるはずである。往年の郭内の人々はこのようにしてナンの生地に邪気払いを施し，遥か西域の祖地カフカズの伝統を守り伝えていたものと解釈される。

おわりに

このたびの論考は，異色の凸状卍紋を追い，その民族的・文化的出自に迫ることをねらいとした。論述の骨子を支えたイラン系騎馬遊牧民とのかかわりを示す種々の考古学資料は，今後ともそれぞれについてさらなる考察を重ね，各々が持つ文化的価値を広く世に知らしめて行きたいと望んでいる。今後は，生活，宗教，軍装備，装身具，遊具などの出土資料を踏まえ，モンゴル王朝に仕えたアラン族の中華本土における動向，さらには中国の文献ならびに沖縄に伝わる文献資料などにも詳細な検討を加えて，往年の今帰仁の武装勢力と元朝末期のアランの武人たちとの関係を紐解く論文の完成をめざしたい。

参考文献

Álvarez Peña, Alberto, *Simbología mágico－tradicional,* Gijón, Picu Urriellu, 2002, 1ª.ed.

Barcharach S., Bernard, *A History of the Alans in the West,* Minneapolis, University of Minesota Press, 1973.

バーハンスフ，ヤ・ベ 『ハスの発祥地は何処』 ウランバートル・インタープレス 2000年.

ドーソン 『モンゴル帝国史 2』 佐口 透 訳注 平凡社 1994年.

江上波夫・佐原 眞 『騎馬民族は来た!?来ない?!』 小学館 1994年.

瞿佑　撰　『歸田詩話』　成化二年(1466).
北川誠一・杉山正明　『世界の歴史9　大モンゴル時代』　中央公論社　1997年.
前嶋信次　『世界の歴史8　イスラム世界』　河出書房新社　2001年.
『国史大辞典』　第十三巻　吉川弘文館　1992年.
NHK 取材班編　『大モンゴル3　大いなる都 巨大国家の遺産』　角川書店　1992年.
『今帰仁城跡発掘調査報告 I』　今帰仁村教育委員会　1983年.
『今帰仁城跡発掘調査報告 II』　今帰仁村教育委員会　1991年.

Una reflexión sobre la importancia del comercio de añil en Nueva España (1558-1810)

Makiko Murata

Introducción

Desde tiempos inmemoriales los diferentes pueblos del mundo han producido con la planta de añil los distintos matices de azul. Los indígenas del Nuevo Mundo también producían este tinte para teñir telas y el cabello, y pintar murales.

El cultivo del añil en Nueva España empezó principalmente en la Capitanía General de Guatemala. Los españoles que llegaron a esta zona prestaron atención al añil como un producto aprovechable ya que los recursos minerales eran insuficientes.[1]

En Europa, a partir del siglo XVII había una gran demanda de este tinte debido a las guerras. El tinte se usaba para teñir de azul los uniformes militares, fenómeno que motivó a Portugal, Francia, Holanda, Inglaterra y España comenzaran a impulsar la producción de añil en sus colonias y para la segunda mitad del siglo XVIII llegó su auge y se produjo el *boom* de añil en el mercado mundial.

Los principales estudiosos del añil, Robert S. Smith[2] y Manuel Rubio Sánchez,[3] han indicado que se puede entender la historia económica novohispana durante la época colonial estudiando los ciclos de prosperidad y decadencia de la industria añilera desde fines del siglo XVI hasta principios del XIX; teniendo un primer momento de declive en el siglo XVII, cuando al igual que el resto de la economía colonial, la

---

[1] En Guatemala, primeramente intentaron industrializar el cacao, sin embargo, el de Guayaquil era de superior calidad, comparándolo con el de Guatemala, consecuentemente no alcanzó a ser un gran producto comercial entre Nueva España y la metrópoli.

[2] Robert S. Smith (1959): "Indigo Production and Trade in Colonial Guatemala", *Hispanic American Historical Review HAHR* XXXIX; 2, pp. 181-211.

[3] Manuel Rubio Sánchez (1976): *Historia del añil o xiquilite en Centro América*, Ministerio de Educación, San Salvador, 2 vols.

industria añilera también se vio seriamente afectada. En el siglo XVIII la Reforma Borbónica revitalizó su actividad y la industria añilera alcanzó su mayor auge, producto de este éxito se publicaron dos textos: *El puntero apuntado con apuntes breves*[4] de autor anónimo[5] y *Tratado del xiquilite y añil de Guatemala*[6] de José Miranda Moziño, que son fuentes valiosas sobre la producción de añil durante la época colonial.

En el presente trabajo intentaremos analizar la estructura de la industria añilera en Nueva España para comprobar la importancia que tenía el comercio de añil para España, por lo que la familia real española aceleró su comercialización a finales del siglo XVI; y aclararemos los motivos de su desarrollo después del siglo XVII. Además, observaremos el impacto que dejó el comercio de añil en el mercado mundial durante el *boom* de añil en la segunda mitad del siglo XVIII.

1. El inicio de la comercialización del añil

En la primera mitad del siglo XVI, Carlos I (reinado 1516-1556) intentó comercializar el añil europeo en Nueva España y fracasó. Durante el reinado de Felipe II se llevó a cabo el descubrimiento del añil nativo en Nueva España, lo que marcó el inicio de su producción y posterior comercialización.

En Europa se utilizaba el añil sólo para teñir telas. En el siglo XIII, el añil ya se cultivaba y fabricaba principalmente en Türingen, Alemania y Toulouse, Francia.[7] En estos tiempos, los comerciantes pérsicos negociaban el añil de India con los de Venecia, por lo que los tintoreros italianos lo utilizaron habitualmente, sin embargo, no se extendió por

---

[4] Trata sobre el conocimiento y experiencia de los expertos añileros, "punteros". (1972): *El puntero apuntado con apuntes breves*, Ministerio de Educación, San Salvador.

[5] Sobre la polémica acerca de su autor y la fecha exacta de su publicación. Véase *El puntero apuntado con apuntes breves,* pp. I-XVI.

[6] José Mariano Moziño, un botánico real, en 1799 escribió por orden del Rey sobre la técnica del proceso de la producción del añil para que siguiera al futuro, además el desarrollo tecnológico, José Mariano Moziño (1976): *Tratado del xiquilite y añil de Guatemala*, Ministerio de Educación, San Salvador.

[7] Jenny Balfour-Paul (1998): *Indigo*, British Museum Press, London, pp. 33-35.

toda Europa debido a su alto precio. Por otra parte, su fama de buena calidad se difundió en toda Europa. Entrando al siglo XV, Portugal fu el precursor de la importación del añil de India junto con otras especias.[8]

En España, los comerciantes de Burgos extendieron sus actividades con el añil francés. Uno de los más grandes comerciantes, Diego de Bernuy Orense, monopolizó el comercio de añil francés de Toulouse; entre 1546 y 1550 vendió 1,729 toneladas por año, de las que 1,074 vendió en Flandes y Londres; y el resto en Zaragoza, Valencia, Toledo, Cuenca y Segovia.[9] Esto pone de manifiesto que España tenía una enorme necesidad de importar el añil del Nuevo Mundo para no depender de su importación de otros países.

En 1535 Carlos I ordenó a dos alemanes, Enrique Ynguer y Alberto Cuon, ingenieros de añil europeo[10] *pastel*,[11] quienes llevaron a cabo el cultivo del *pastel* en Nueva España. Eligieron como lugar de los cultivos en alrededores de Xalapa, Veracruz, que entonces era el único puerto entre Nueva España y España. Sin embargo, el 28 de enero de 1545, Alberto Cuon informó en Valladolid el fracaso de tal encomienda, debido a la escasez de la mano de obra indígena por las epidemias y al trabajo forzoso, y a que no se aclimató el añil europeo al Nuevo Mundo.[12]

Al comenzar el régimen de Felipe II (reinado 1556-1598), se pudo llevar a cabo su comercialización. Esto comenzó con un informe que la Audiencia de Guatemala envió en 1550 gracias al testimonio del indio Fernando Bracamonte, quien afirmaba que los indios de la provincia de

---

[8] María Justina Saravia Viejo (1994): *La Grana y el añil. Técnicas tintóreas en México y América Central*, Escuela de Estudios Hispano-Americanos (EEHA), Sevilla, pp. 16-17.

[9] En cuanto a los comerciantes del añil en Burgos, véase Hilario Casado Alonso (1990): "El comercio del *pastel*. Datos para una geografía de la industria pañera española en el siglo XVI", *Revista de historia económica*, N° 3, pp. 528-529.

[10] *Isatis tinctoria L.* Añil europeo *woad*, del vocablo germánico *<guède>*.

[11] Originalmente la palabra *pastel* proviene de describir la pasta ("pâte" en francés, "pastello" en italiano) del tinte. Jean-Pierre Berthe (1960): "El cultivo del *pastel* en Nueva España", *Historia mexicana* IX: 3, p. 341.

[12] Respuesta de Alberto Cuon. Valladolid, 28 de enero de 1545. Archivo General de Indias (AGI), *Justicia* 1023, N° 1, R° 5. María Justina Saravia Viejo (1978): *Don Luis de Velasco, virrey de Nueva España 1550-1564*, EEHA, Sevilla, p. 414.

Yucatán sacaban el tinte de añil.[13] El 13 de junio de 1558, a partir de esta información, Felipe II emitió una real cédula para que se realizara una detallada investigación del añil de Guatemala. Sus apartados eran: la variedad, la cantidad necesaria para llevar a cabo la comercialización, la calidad, si tenía el mismo efecto del *pastel* para teñir, si era silvestre o de cultivo y su área de producción, si era mineral o no, el medio para transportarlo, el método y el periodo de conservación y si provocaba algún daño en los nativos.[14]

Según Rubio Sánchez, la Audiencia de Guatemala mandó una detallada descripción de lo solicitado con muestras auténticas para el Rey, quien al parecer la transmitió a personas doctas en la materia, quienes, después de pedir nuevos informes y estudiar la planta, dieron su opinión para que, posteriormente, el Rey por medio de la real cédula, dictara la mejor conveniencia de procesar el añil, a fin de comercializarlo.[15]

No sabemos con precisión cómo fue el proceso para iniciar su comercialización, así como tampoco la fecha exacta de su inicio, porque no conocemos la respuesta a la real cédula del 13 de junio de 1558. Sin embargo, podemos inferir su desarrollo principalmente a través de los dos libros mencionados.[16]

2. La producción del añil

En el Nuevo Mundo, el añil crecía de manera silvestre. Según Moziño, existen distintas especies de añil nativo en Europa, América e India, siendo el de América y el de India de la misma familia, *indigoferra*.[17] Como este tipo contiene más colorante, es decir, tiene el

---

[13] Diego López Cogolludo (1957) (primera edición en 1688): *Historia de Yucatán*, Académica Literaria, México, D. F., Libro séptimo, Cap. III, p. 375.
[14] Archivo General de Centroamérica (AGC), Leg. 1511, Fol. 237, Manuel Rubio Sánchez (1976): *Historia del añil o xiquilite en Centro América*, Vol. I, Ministerio de Educación, San Salvador, pp. 28-31.
[15] *Ibid.*, Vol. I, p. 31.
[16] *El puntero apuntado con apuntes breves* y *Tratado del xiquilite y añil de Guatemala.*
[17] Moziño (1976): pp. 4-7.

efecto de teñido más alto, era el más cotizado.

Donde crecía el añil en Nueva España era en el sur de Yucatán, Chiapas,[18] Morelos, el centro de Michoacán, alrededor de Juchitán en Oaxaca, [19] el sureste de Guatemala, todo El Salvador, la costa de Nicaragua y el sur de Honduras.[20] En estas zonas, el añil se cultivaba en las haciendas y su ciclo iniciaba en febrero y marzo, cuando empezaba la preparación de terreno, esperando la primera lluvia desde finales de abril a los primeros de mayo para sembrar.[21] La cosecha tenía que hacerse antes de que floreciera, o sea desde fines de agosto y hasta primeros de diciembre, ya que la floración reduce el colorante contenido en las hojas de añil.[22] Durante estos tiempos continuaba la fabricación del tinte. Este proceso se veía afectado frecuentemente por insectos dañinos,[23] plaga de langostas[24] y catástrofes naturales como huracanes.

En las haciendas también se cultivaba elotes o frijoles, productos agrícolas que tienen distinta época de siembra y cosecha. Asimismo, era posible manejar la ganadería porque los ganados no comían las hojas de añil, además se podían aprovechar para preparar y arreglar los terrenos.[25]

Los obrajes para el añil se construían en las mismas haciendas y el proceso para hacer tinte era el siguiente: se construían tres pilas escalonadas en el obraje, en la primera pila se ponía añil y luego se llenaba de agua. Se dejaba una noche para que empezara la fermentación,

---

[18] Mario Humberto Ruz (1979): "El añil en el Yucatán del siglo XVI", *Estudios de cultura maya*, N° 7, p. 134.
[19] *Ibid.*, p. 134.
[20] Rodolfo Cardenal (1996): *Manual de historia de Centroamérica*, Universidad Centroameriana, San Salvador, p. 130, David Browning (1975): *El Salvador, la tierra y el hombre*, CONCULTURA, San Salvador, pp. 268-269.
[21] Julio Rossignon (1859): *Manual del cultivo del añil y del nopal*, Enciclopedia popular-mejicana, París, p. 101.
[22] Moziño (1976): pp. 28-29.
[23] *Ibid.*, p. 15.
[24] Aunque las plagas de langosta fueron causadas daños con frecuencia, sobre todo fueron grandes en 1723, 1732, 1772-1775 y 1779-1805. Robert S. Smith (1959): "Indigo Production and Trade in Colonial Guatemala", *HAHR* XXXIX; 2, p. 183.
[25] Browning (1975): pp. 131-133.

y cuando cambia el color del agua al negro quiere decir que está llegando a buen "punto", lo que era la señal para transponer esta agua a la segunda pila.[26] Luego, los trabajadores batían el agua metiéndose en la pila en muchos de los obrajes.[27] A continuación, cuando levantaba gran espuma amarilla con visos azules, momento en que tiene su "punto" y sazón, se desechaba toda la espuma y el agua verde-azulosa se pasaba a una tercera pila más honda. En esta pila se asienta en la base, de donde la sacaban y colaban, con el lodo resultante se hacían "panes" que se ponían en tablas al sol para secar.[28] Así elaborado el añil, era más fácil de transportar y la mejor manera de conservarlo. Se guardaba en zurrones[29] o cajones de entre 25 y 28 kilogramos.

Quienes distinguían el "punto" se llamaban "punteros", y de sus decisiones dependía la calidad del tinte. Moziño registra que para ser puntero profesional se requería entre 7 y 10 años para tener la suficiente experiencia. Así que los punteros tenían un papel clave en todo el proceso de la producción del añil.

3. El desarrollo del comercio de añil

Como hemos visto, se cultivaba y se fabricaba el añil en las haciendas, donde la principal mano de obra eran los indios. Los punteros que desempeñaban un papel importante en la extracción de tinte también eran indios.

Aunada a que las zonas de producción del añil eran tierras calientes, el agotador trabajo en los obrajes dañaba el cuerpo de los trabajadores. Su trabajo era echar unas toneladas del añil a la pila y

---

[26] Antonio Vázquez de Espinosa (1992): *Compendio y descripción de las Indias Occidentales*, Historia 16, Madrid, pp. 33-34.

[27] «La experiencia ha mostrado los grandes daños que los indios naturales de estas provincias han recibido en haberlos metido en los obrajes de tinta añil...», *El puntero* (1972): p. XXXI.

[28] Vázquez de Espinosa (1992): pp. 33-34.

[29] Bolsa grande de pellejo que usaban los pastores para guardar y llevar la comida y sus pertenencias. Delia Pezzat Arzave (2001): *Guía para la interpretación de vocablos novohispanos*, Archivo General de la Nación, México, D. F., p. 175.

llenarla de agua, después tenían que batir el agua con mucha fuerza, metiéndose en la segunda pila. En ese momento, estaban las moscas que aparecían en las pilas portadoras de enfermedades como malaria,[30] fenómeno que provocaba la muerte de muchos trabajadores. Por ello, se prohibió el uso de los indios en las haciendas del añil por la real cédula de 1563.[31]

Sin embargo, los hacendados continuaron utilizando la mano de obra indígena ya que era la única. Como se violaba esa regla repetidamente, por orden del Rey, la Audiencia de Guatemala prohibió de nuevo el uso de los indios en los obrajes en 1581,[32] 1601,[33] 1636 y 1643.[34] La real cédula del 20 de marzo de 1582 ordenó enviar un informe de la situación laboral de los indios en toda la producción del añil. Desde 1592, la Corona empezó a enviar visitadores para supervisar estrictamente a los infractores.[35] Algunos hacendados contrataban a los indios pagando un salario alto, que iba entre 15 y 30 pesos por día, oponiéndose a las ordenanzas.[36] Prueba de esto es el testimonio de un indio en 1697: «que vino a esta hacienda del añil de su voluntad para remediar sus necesidades y poder pagar su tributo y vestir a su mujer, a ganar dos reales en cada día según se estila que esa es la paga, lo han tratado bien y sin molestia, le han dado de comer carne y tortilla, y los viernes y demás vigilias frijoles y queso.»[37]

En 1732, los hacendados suplican abolir la prohibición de que no

---

[30] Moziño (1976): pp. 33-34.
[31] "Que los indios no trabajen en el beneficio del añil, aunque sean voluntarios", (1973): *Recopilación de leyes de los reinos de las Indias*, Ley III, Título XII, Libro VI, (Año de 1681), Cultura Hispánica, Madrid, pp. 254-255.
[32] Rubio Sánchez (1976): Vol. I, p. 9.
[33] *Ibid.*, Vol. II, p. 15.
[34] Francisco de Solano (1974): *Los mayas del siglo XVIII*, Cultura Hispánica, Madrid, p. 328.
[35] Rubio Sánchez (1976): Vol. II, p. 11.
[36] Archivo General de Gobierno, Guatemala (AGG), Leg. 55, exp. 577; Leg. 609, Exp. 5525-5549; Leg. 610, Exp. 5550-5572; Leg. 611, Exp. 5573-5587; Leg. 622, Exp. 5762; Leg. 4680, Exp. 40, 304; Leg. 4703, Exp. 40,680, Smith (1959): pp. 188-189.
[37] AGG, Leg. 1, Exp. 5-6, es un testigo de un caso criminal por unos indios, *Ibid.*, p. 188.

trabajen los indios en las haciendas de las provincias de San Salvador, San Miguel y San Vicente, alegando «el beneficio de la tinta añil en indios» y «por lo que no podían alimentarse ellos, ni sus mujeres ni pagar los tributos.» Además, «aunque los alcaldes mayores lleguen a averiguar ser falsos los juramentos, y que han trabajado, se los disimulan por los intereses, que se les sigue: de que resulta, el que nunca se llegue a conseguir la total prohibición...»[38]

Por otra parte, a pesar de que estaba controlado por las ordenanzas el no poder ser alcaldes mayores ni miembros del Cabildo,[39] en realidad muchos hacendados llegaron a serlo.[40] Finalmente, estas ordenanzas no tuvieron efecto, por lo que en 1738 el Rey lo permitió con algunas condiciones, tras 175 años de prohibición.[41] Respaldado por el poder político en el Cabildo, los hacendados legalizaron el repartimiento de la mano de obra indígena.

En 1782 se fundó el Real Montepío de Cosecheros de Añil, y en 1784 se promulgaron las ordenanzas para reconfirmar las condiciones de trabajo basado en la real cédula de 1735,[42] arreglando y agregando detalladamente otros artículos.[43] Con estas ordenanzas la familia real comprobaba la seguridad de la mano de obra indígena y al mismo tiempo la defensa de los indios. La familia real buscaba la defensa de los indios

---

[38] "Que se informe de cuantos operarios se regulen para la labor de añil, Guatemala, 1 de octubre de 1732", AGNM, Reales cédulas Leg. 51, Exp. 111, fojas 410r-411v.

[39] Rubio Sánchez (1976): Vol. I, p. 36.

[40] *Ibid.*, Vol. II, p. 140.

[41] Ciro F. S. Cardoso, y Héctor Pérez Brignoli (1977): *Centroamérica y la economía occidental (1520-1930)*, Universidad de Costa Rica, San José, p. 85.

[42] "Tinta de añil. Cumplir con la cédula del 1 de octubre de 1732, sobre la prohibición del beneficio en Guatemala, 17 de septiembre de 1735, Archivo General de la Nación, México (AGNM), *Reales cédulas*, Leg. 55, Exp. 70, fojas 217-219v.

[43] Ordenanzas formadas por el Oidor Don José Ortiz de la Peña para los indios que trabajen en las haciendas del añil conforme a las instrucciones que recibiera de Don José de Estachería, gobernador y capitán general de Guatemala y en virtud de los tres informes suscritos por los cabildos de San Miguel, San Salvador y La villa de San Vicente de Austria. Se trascriben unos reales cedulas, Guatemala, 5 de marzo de 1784, AGNM, *Jesuitas*, Vol. 1-13, Exp. 71, fojas 328-334v.

ya que gracias a la producción del añil la Corona recibía ganancias.

Al siguiente año de la fundación del Montepío, en 1783, Juan Fermín Aycinena, que era comerciante añilero y organizador del Montepío, recibió el título de conde. Según el economista Troy S. Floyd la fortuna entonces de Aycinena alcanzó aproximadamente un millón de pesos y poseía por lo menos seis haciendas.[44] Al fondo de su gran progreso hubo el casamiento con la hija de un gran comerciante de la Compañía de Barcelona, Joseph Piñol. Así, al ampliar su negocio estableció casas comerciales en México, Lima, Cádiz y Londres. Además Aycinena fue diputado del ayuntamiento de Guatemala por 20 años.[45]

Otros grandes comerciantes de añil que llegaron de la Metropolí a Guatemala como Miguel Ignacio de Vicuña (navarrense) y Cayetano Yúdice (genovés) en 1749, negociaron con añil y aumentaron su actividad.[46] Yúdice se casó con una hija de la familia de los Habsburgo.[47] Basilio Vicente Romá y su hermano Luis (valencianos) llegaron en la década de 1740 y se casaron con las hijas de Josefa Alvares de las Asturias y Nava. Basilio Vicente poseyó por lo menos una hacienda de añil y Cayetano Yúdice seis haciendas. Basilio Vicente empezó a trabajar en el cabildo en 1742, luego se hizo regidor del cabildo de la ciudad de Guatemala[48] y durante 41 años prestó servicio en él. También Cayetano ofició de diputado del ayuntamiento durante 16 años. Así, los comerciantes formaron una gran fortuna por casarse con las hijas de grandes comerciantes u hombres acomodados, llegando a una categoría social importante con poder político. El resultado, la industria añilera produjo poderosos grupos locales en la Colonia.

---

[44] Troy S. Floyd (1965): "The Indigo Merchant: Promoter of Central American Economic Development, 1750-1808", *Business History Review* XXXIX: 4, p. 480.
[45] *Ibid.*, p. 469.
[46] José Antonio Fernández Molina (1992): *Colouring the world in blue. The indigo boom and the Central American market. 1750-1810*, Ph. D. Thesis, University of Texas, Austin, pp. 312-313.
[47] Floyd (1965): pp. 481-82.
[48] Fernández Molina (1992): p. 317.

Cuadro 1

Fortunas de los comerciantes añileros

Comerciantes	Año de llegada a Guatemala	Fortunas (pesos)	Año
Juan Fermín Aycinena	1757 (desde México)	1,000,000	1783
Cayetano Pavón	1750s	618,831	1781
Diego Peinado	1750s	50,000	1764
		307,361	1793
Cayetano Yúdice	1749	150,015	1770
		229,065	1778
Juan Bautista de Irisari	1780s	158,521	1796

Fuentes: (Floyd, 1965: 468 y 480, Fernández Molina, 1992: 322.)

4. El resultado del comercio español en el mercado mundial de añil

En Guatemala, a partir de 1761, comenzó a celebrarse la feria del añil una vez por año donde se acordaban las tres calidades del tinte: flor, sobresaliente y corte. En la feria, los hacendados negociaban para poner los precios, sin embargo, los comerciantes muchas veces no estaban de acuerdo. A partir de 1771, por orden del Rey, se celebraron juntas para decidir el precio, en ellas participaban doce comerciantes de las zonas productoras principales de añil en la Capitanía General de Guatemala, además del oficial municipal, quien autorizaba el precio final.[49]

A finales del siglo XVIII, el precio se elevó de 4 reales a 29 reales por zurrón de tinte de corte en España. El valor del tinte de flor y sobresaliente aumentó en 290 por ciento y 181 por ciento, respectivamente, más que el de corte.[50] Se apreciaba mucho el añil guatemalteco en el mercado europeo. Según un dato de 1775, el orden de valoración en orden descendiente era: flor, sobresaliente y corte del añil

[49] AGI, *Audiencia de Guatemala*, Leg. 699. Smith (1959): pp. 200-202.
[50] Fernández Molina (1992): pp. 318-319.

guatemalteco, añil de India, de Europa, de Florida, de las islas Antillas y de Carolina.[51]

A diferencia de la plata y otros productos, donde la Corona fijaba su precio, en el caso del añil eran los comerciantes añileros de la Colonia quienes lo hacían. Ni el Rey, ni el virrey de la Nueva España, ni el capitán general de Guatemala, ni el consulado de España intervenían en este asunto.

Terminando la feria, llevaban el tinte principalmente a Veracruz, a Cartagena y a los puertos hondureños. A causa de que la piratería holandesa e inglesa aparecía con frecuencia en el Mar Caribe, el puerto más aprovechable era Veracruz, por lo menos hasta mediados del siglo XVII.[52] Tomaban la ruta para Cartagena desde Guatemala pasando por San Salvador, San Miguel, luego a través del río San Juan en Granada, y de allí a Panamá por vía terrestre o marítima.[53] La ruta desde los puertos hondureños tenía más posibilidad de encontrarse con piratas, por lo que hasta principios del siglo XVIII aprovecharon esta ruta con menos frecuencia.[54]

A comienzos del siglo XVIII, la Reforma Borbónica causó un gran cambio en el régimen colonial español. Carlos III liberalizó el comercio entre los países coloniales en 1764,[55] y entre la Colonia y la Corona en 1778 para aumento de ingresos fiscales.[56]

Esperando más ganancia, la familia real fundó en 1782 el Real Montepío de Cosecheros de Añil como una institución para controlar la producción del añil.[57] Este Montepío no sólo otorgó temporalmente préstamos bancarios para los cosecheros de añil, sino que también decidió

---

[51] *Ibid.*, p. 48.
[52] Alejandro de Humboldt (1966): *Ensayo político sobre el reino de la Nueva España*, Porrúa, México, D. F., pp. 8-9.
[53] Thomas Gage (1994): *Nuevo reconocimiento de las Indias Occidentales*, CONACULTA, México, D. F, p. 190.
[54] Troy S. Floyd (1961): "The Guatemalan Merchants, the Government, and the *Provincianos*, 1750-1800", *HAHR* XLI: 1, pp. 94-95.
[55] Rubio Sánchez (1976): Vol. I, p. 228.
[56] *Ibid.*, p. 304.
[57] *Ibid.*, Vol. II, p. 147.

el precio final del añil y administró desde la producción hasta el comercio, con la cláusula del "Estatuto de la Sociedad de Cosecheros de Añil" formada por 40 artículos.[58]

La exportación del añil para España siguió aumentando después de la liberación del comercio libre en 1778, cuya cifra que llegó a su máximo en 1792, para después empezar a reducirse.[59] Es comúnmente aceptado en la historiografía que el libre comercio no proporcionó gran beneficio a España, y se puede decir que el comercio de añil fue un caso especial, en el que el comercio libre ayudó a su desarrollo sin apoyo de la Corona.

A fines del siglo XVI, Portugal emprendió el comercio de añil con India. Posteriormente, Holanda en 1600 y Inglaterra en 1602, fundaron sus respectivas Compañía de las Indias orientales e importaron el añil de India, que era de mejor calidad y más barato que el de Europa.[60] A partir de 1655, Inglaterra aceleró el cultivo de añil en su colonia, Jamaica, luego en 1672, Francia ocupó Santo Domingo y emprendió la producción del mismo.[61] Portugal también empezó a cultivarlo en su colonia, Brasil, en la primera mitad del siglo XVII, y hacia 1760 se sitúa en su momento más próspero.[62] Debido a lo que los países europeos producían el añil en sus colonias y lo trasportaban a Europa, se produjo el llamado *boom* del índigo.

Cuando llegó al auge la exportación del añil hacia España, otros países europeos como Inglaterra fomentaban la producción del añil en sus colonias para poder monopolizar el mercado en Europa. El progreso de la revolución industrial en Inglaterra aceleró la producción del añil para la

---

[58] Robert S. Smith (1950): "Documents. Statutes of the Guatemalan Indigo Growers´ Society", *HAHR* XXX; 3, pp. 336-345.

[59] AGI, *Audiencia de Guatemala*, Leg. 755, 1783-92: AGI, *Audiencia de Guatemala*, Leg. 668, 1793-1800 y 1801-02: Smith (1959): p. 202, 1809-18: *Ibid.*, p. 198.

[60] Trata de la Compañía de las Indias orientales: Balfour-Paul (1998): pp. 44-48.

[61] *Ibid.*, pp. 66-67.

[62] Sobre la producción de añil en Brasil, véase Dauril Alden (1965): "The Growth and Decline of Indigo Production in Colonial Brasil: A Study in Comparative Economic History", *Journal of Economic History*, Vol. XXV; 1, pp. 35-60.

industria lanera, y el inicio del cultivo de algodón en India oriental y occidental, evolucionó la industria algodonera. Así, Inglaterra tomó la iniciativa del comercio de añil en Europa.

Cuadro 2

Exportación a España e Inglaterra desde sus coloniales

Año	a España	a Inglaterra
1620～1630	206tons. (desde Nueva España)	136 ～ 182tons. (sólo desde Guyarat)
1631	161tons.	
1638～1639		165tons. (sólo desde Guyarat)
1643	0.0543tons.	
1782	502tons. (sólo desde Guatemala)	11tons.
1786		91tons.
1795	316tons.	1,992tons. (sólo desde
1797	425tons.	Jamaica)
	613tons.	
1815	188tons.	3,500tons. (sólo desde Bengala)

Fuentes: Balfour-Paul, 1998: 47, 66 y 71, W.H. Moreland,1923: 115, Smith, 1959: 197, 198 y 202.

Si vemos sólo la producción hasta 1631, la importación del añil por España era más alta que la de Inglaterra. Luego su producción se redujo, en cambio, Inglaterra extendió el cultivo del añil en sus colonias. Desde 1655, la principal zona productora del añil era Guyarat de India, posición que mantenía en 1782, momento de la fundación de la Real Montepío de Cosecheros de Añil. Sin embargo, llegando al auge la producción del añil en Jamaica, en 1795, Inglaterra alcanzó a la de España. Entrando al siglo XIX, Inglaterra fomentó la producción en Bengala, el este de India, extendiendo más su producción. En la primera mitad del siglo XIX, con las guerras de Independencia en la colonia española, Inglaterra destacó en el mercado mundial del añil y España inició una lenta y progresiva decadencia.

Conclusión

Podemos afirmar que en un primer momento, la producción del añil en Nueva España impulsada por Carlos I fue un fracaso debido a que el añil europeo no se aclimató a la tierra del Nuevo Mundo, además de la escasez de la mano de obra indígena. Sin embargo, gracias a que durante el régimen de Felipe II se descubre el añil silvestre en la Capitanía General de Guatemala, España se dedicó a producirlo con gran éxito desde fines del siglo XVI.

Los hacendados españoles de la Capitanía General de Guatemala pudieron asegurar la mano de obra indígena ya que el Rey permitió usarla solamente para la producción del añil, por ello, se consiguió que se produjera un tinte de mejor calidad comparado con el europeo o el de India. Hasta fines del siglo XVIII, siguieron produciendo tinte de mejor calidad y en gran cantidad. Su fama destacó en el mercado europeo. Esto permitió que España pasara de ser un país importador a uno exportador, por lo que la familia real española fomentó la producción añilera en Nueva España. A fines del siglo XVIII extendió su mercado en Europa y aumentó la potencia fiscal con su ganancia.

En la historiografía económica comprobamos que la prosperidad y la decadencia de la economía colonial española coinciden con la de la industria añilera. Si bien la aceleración del comercio libre impulsada por Carlos III fracasó, provocando el derrumbamiento del régimen exclusivista en las colonias españolas, en la presente investigación hemos podido comprobar que después de introducir el comercio libre, no disminuyó la cifra de exportación de Guatemala a España, sino que incluso aumentó, aún sin la protección de la Corona española.

Podemos concluir que el comercio libre aceleró la industria añilera provocando el aumento de ingresos fiscales gracias a las actividades de los comerciantes añileros, quienes fundaron el Real Montepío de Cosecheros de Añil, estableciendo así una base firme para el posterior desarrollo de esta industria. Se puede considerar que los comerciantes

añileros pudieron mantener y extender su mercado gracias a la introducción del régimen del libre comercio.

Por otra parte, el añil no fue sólo un producto comercial entre Nueva España y la metrópoli, sino que también inició una nueva industria. La categoría de los indios no mejoró, así como tampoco sus condiciones de trabajo. No obstante, sabemos de algunos indios que recibieron buen trato y salario según consta en un documento de la época. Gracias a ellos avanzó la técnica para extraer el tinte, lo que permitió el reconocimiento de la buena calidad del añil guatemalteco en todo el mundo. Los comerciantes añileros acumularon riquezas y consiguieron poder político, transformando a la nueva clase social dominante y con ello al resto de la sociedad.

Bibliografía

Manuscritos

Archivo General de la Nación, México:
Reales cédulas, Leg. 51, 55.
Jesuitas, Vol. 1-13.

Libros y artículos

Anónimo (1992): *El puntero apuntado con apuntes breves,* Ministerio de Educación, San Salvador.

ALDEN, Dauril (1965): "The Growth and Decline of Indigo Production in Colonial Brazil: A Study in Comparative Economic History", *Journal of Economic History*, Vol. XXV; 1, pp. 35-60.

BALFOUR-PAUL, Jenny (1998): *Indigo*, British Museum Press, London.

BERTHE, Jean-Pierre (1960): "El cultivo del *pastel* en Nueva España", *Historia Mexicana* IX: 3, pp. 340-367.

BROWNING, David (1975): *El Salvador, la tierra y el hombre*, Ministerio de Educación, San Salvador.

CARDENAL, Rodolfo (2001): *Manual de historia de Centroamérica,* Universidad Centroamericana, San Salvador.

CARDOSO, Ciro F. S. y PÉREZ BRIGNOLI, Héctor (1977): *Centroamérica y la economía occidental (1520-1930),*

Universidad de Costa Rica, San José.
CASADO ALONSO, Hilario (1990): "El comercio del *pastel*. Datos para una geografía de la industria pañera española en el siglo XVI", *Revista de Historia Económica* VIII: 3, pp. 523-548.
FERNÁNDEZ MOLINA, José Antonio (1992): *Coloring the world in blue. The Indigo boom and the Central American market, 1750-1810*, Ph. D. thesis, University of Texas, Austin, 495 pp.
FLORESCANO, Enrique y MENEGUS, Margarita (2000): "La época de las reformas borbónicas y el crecimiento económico (1750-1808)", *Historia general de México*, El Colegio de México, México, D. F., pp. 365-430.
FLOYD, Troy S. (1961): "The Guatemalan Merchants, the Government and the *Provincianos*, 1750-1800", *Hispanic American Historical Review* XLI: 1, pp. 90-110.
----- (1965): "The Indigo Merchant: Promoter of Central American Economic Development, 1750-1808", *Business History Review* XXXIX: 4, pp. 465-488.
GAGE, Thomas (1994): *Nuevo reconocimiento de las Indias Occidentales*, CONACULTA, México, D. F..
HAMNETT, Brian R. (1976): *Política y comercio en el sur de México, 1750-1821*, Instituto Mercado de Comercio Exterior, México, D. F.
HUMBERTO RUZ, Mario (1979): "El añil en el Yucatán del siglo XVI", *Estudios de Cultura Maya,* Vol. XII, pp. 111-156.
HUMBOLDT, Alejandro de (1966): *Ensayo político sobre el reino de la Nueva España*, Porrúa, México, D. F..
KOJIMA, Hideo (1997): "Apuntes sobre el añil o índigo, principalmente de Guatemala y otras regiones de Centroamérica", *Informe de las Investigaciones etnológicas en el Centro y Sur de Guatemala, 1991-1994*, Museo de Tabaco y Sal, Tokio, pp. 499-543.
LÓPEZ COGOLLUDO, Diego (1957): *Historia de Yucatán*, Académica Literaria, México, D. F..
LORENZO SANZ, Eufemio (1979): *Comercio de España con América en la época de Felipe II*, 2 vols., Institución Cultural Simancas, Valladolid.
MACLEOD, Murdo J. (1980): *Historia socio-económica de la América Central española, 1520-1720*, Biblioteca Centroamericana de las Ciencias Sociales, Guatemala.
MOZIÑO, José Mariano (1976): *Tratado del xiquilite y añil de Guatemala* (Colección antropología e historia, N° 5), Ministerio de Educación, San Salvador.
PASTOR, Rodolfo (1988): *Historia de Centroamérica*, El Colegio de México, México, D. F.
PEASE G. Y., Franklin (e.d.) (2000): *Historia general de América*

Latina, 9 vols., UNESCO, Madrid.
PEZZAT ARAZAVE, Delia (2001): *Guía para la interpretación de vocablos novohispanos*, Archivo General de la Nación, México, D. F..
Recopilación de leyes de los reinos de las Indias (1973): 5 vols., Cultura Hispánica, Madrid.
ROSSIGNON, Julio (1859): *Manual del cultivo del añil y del nopal*, Enciclopedia popular-mejicana, Paris.
RUBIO SÁNCHEZ, Manuel (1976): *Historia del añil o xiquilite en Centro América*, 2 vols., Ministerio de Educación, San Salvador.
SARABIA VIEJO, María Justina (1978): *Don Luis de Velasco, virrey de Nueva España 1550-1564*, Escuela de Estudios Hipano-Americanos, Sevilla.
----- (1994): *La grana y el añil. Técnicas tintóreas en México y América Central*, Escuela de Estudios Hspano-Americanos, Sevilla.
SMITH, Robert S. (1950): "Documents. Statutes of the Guatemalan Indigo Growers´ Society", *Hispanic American Historical Review* XXX; 3, pp. 336-345.
----- (1959): "Indigo Production and Trade in Colonial Guatemala", *Hispanic American Historical Review* XXXIX; 2, pp. 181-211.
SOLANO, Francisco de (1975): *Los mayas del siglo XVIII*, Cultura Hispánica, Madrid.
TORRES-RIVAS, Edelberto (e.d.) (1993): *Historia general de Centroamérica*, 6 vols., Siruela, Madrid.
VÁZQUEZ DE ESPINOZA, Antonio (1992): *Compendio y descripción de las Indias Occidentales*, Historia 16, Madrid.
WILLIAM HARRISON, Moreland, (1923): *From Akbar to Aurangzeb. A study in Indian Economic History*, Macmillan, London.

Libros y artículos en japonés

後藤捷一（1974 年）「インド藍興亡小史」『染織と生活』 No. 6 染織と生活社 pp. 92-95.
島崎博（2000 年）『中米の世界史』古今書院.
松井透（1958 年）「19 世紀インドのアイ産技術について」『青山経済論集』第 10 巻 第一・二合併号 pp. 63-90.
-------- （1959 年）「17 世紀のインドのアイ産と政治権力－イギリス東インド会社資料の一検討」『南方史研究』第一号 pp. 37-55.

La ideología y los actos de Jack Shirai en la guerra civil española según el testimonio de Harry Fisher

Keishi Yasuda

Introducción

La guerra civil española, uno de los acontecimientos más trágicos y sangrientos de la historia de España, se combatió durante dos años y nueve meses desde el 17 de julio de 1936 hasta el 1 de abril de 1939. Al término de la contienda, las tropas nacionalistas, encabezadas por las autoridades militares rebeldes, vencieron al bando que respaldaba al gobierno republicano.

Jack Shirai (1900－1937), que participó en las Brigadas Internacionales a favor de la República, fue el único integrante japonés en dicha organización[1]. Las Brigadas Internacionales estaban compuestas mayoritariamente por comunistas y lucharon contra el bando nacionalista durante casi dos años (noviembre de 1936 －noviembre de 1938). El número de sus componentes ascendía a unos 40.000 procedentes de aproximadamente cincuenta y cinco países del mundo[2].

En enero de 1937 Shirai entró en España vía París como integrante de la primera expedición brigadista organizada desde los Estados Unidos. Shirai perteneció al batallón Abraham Lincoln, cuyos combatientes eran mayoritariamente norteamericanos, y el 11 de julio de 1937 murió tiroteado en Villanueva de la Cañada, población situada a unos cinco kilómetros al oeste de Madrid, donde se hallaba combatiendo en la batalla de Brunete[3].

En 1998, transcurridos más de sesenta años desde la muerte de Shirai, Harry Fisher (1911－2003), neoyorquino y camarada del japonés en el batallón, editó su libro de memorias bélicas. En este, Fisher se refiere tres veces a Shirai, haciendo descripciones detalladas sobre el japonés, algo que no ocurre en los libros de otros ex-brigadistas. Una de estas partes descriptivas alude al aspecto ideológico de Shirai en la guerra de España. La ideología que profesaba

---

[1] Kawanari, You, *Spain sensou －Jack Shirai to kokusairyodan－*, Tokio, Asahishinbunsha, 1989, pp. 8, 50.
[2] *Ibidem*, p. 58.
[3] *Ibidem*, pp. 8-9.

exactamente el combatiente japonés durante esta conflagración no se había aclarado en las investigaciones realizadas hasta aquel entonces. Teniendo en cuenta esa situación, este trabajo intenta indagar sobre las acciones de Shirai durante la contienda española a través de la explicación de Fisher, y estudiar, de nuevo, la ideología del soldado nipón.

1. Estudios antecedentes

1-1. Las Brigadas Internacionales

Las investigaciones en lo referente a la guerra civil española han avanzado bastante en el interior y exterior de España, puesto que han pasado más de sesenta años de su finalización. No obstante, en España durante la dictadura del general Francisco Franco (abril de 1939－noviembre de 1975), los estudios en materia de este tema estuvieron controlados por el gobierno. Franco, que había capitaneado a los nacionales en la guerra civil, ejerció la censura en toda publicación contraria a su régimen. La obra *The Spanish Civil War*, del historiador británico Hugh Thomas, conocida y apreciada mundialmente como la bibliografía fundamental sobre este tema, se publicó en Londres en 1961[4]. Pero su versión castellana salió a luz en España en 1976 al año siguiente del fallecimiento del dictador.

En 1986, cincuentenario del inicio de la guerra civil, Paul Preston, historiador inglés al igual que Thomas, dio una definición que reclamaría la atención de muchos investigadores posteriormente:

> Volunteers from all over the world flocked to fight for the Republic. Some were out of work, others were adventurers, but the majority had a clear idea of why they had come: to fight fascism. For the victims of the fascist regimes of Mussolini and Hitler, it was a chance to fight back against an enemy whose bestiality they knew only too well[5].

---

[4] Thomas, Hugh, *The Spanish Civil War*, London, Eyre & Spottiswoode Ltd., 1961; (Versión castellana: Thomas, Hugh, *La guerra civil española*, Barcelona, Grijalbo Mondadori, 1976; existe una nueva edición de 2001.).

[5] Preston, Paul, *The Spanish Civil War 1936-1939*, London, Weidenfeld and Nicolson, 1986, p. 92.

Preston ha insistido en que gran número de los brigadistas llegaron a España apoyando el antifascismo. La ideología fascista consiente los métodos reaccionarios y violentos y profesa el anticomunismo, antiliberalismo y el ultranacionalismo, según sostiene alguna historiografía[6]. Los regímenes italiano y alemán, constituidos por Mussolini en 1922 y por Hitler en 1933 respectivamente, sustentaban esta idea política. En julio de 1936 cuando estalló la contienda española, las tropas nacionalistas pidieron auxilio militar a Italia (22 de julio) y a Alemania (25 de julio), y ambos países accedieron a sus ruegos[7]. Ya en agosto, los nacionales empezaron a utilizar los aviones y armamentos suministrados por estos [8]. Desde el punto de vista republicano, este acontecimiento significó una conspiración de las fuerzas nacionalistas con las potencias en las que se radicaba la inspiración fascista. Este fue el motivo por el que la mayoría de los republicanos juzgaron a los "nacionales" como filofascistas.

En aquel entonces, por otra parte, el Comintern, la Internacional comunista, abrazaba la política antifascista. Al conocer la intervención italo-germana decidió enviar a la España beligerante soldados para apoyar a las fuerzas republicanas. Eso conduciría la creación de las Brigadas Internacionales. El reclutamiento brigadista se llevó a cabo desde el mes de septiembre a través del partido comunista de cada país. Finalmente el 12 de octubre unos 500 primeros voluntarios extranjeros arribaron al puerto de Alicante[9].

En cuanto a las Brigadas Internacionales, la publicación fundamental durante estas dos últimas décadas ha sido el trabajo de Andreu Castells[10], editado en 1974. Sin embargo, en 1998, César Vidal, joven historiador español, hizo pública la investigación más actualizada sobre la materia. Vidal ha reflejado en su obra los documentos de las Brigadas Internacionales, que se hallaban en Moscú y se podían consultar desde el derrocamiento de la Unión Soviética, y las

---

[6] Antón Mellón, Joan (ed.), *Ideologías y movimientos políticos contemporáneos*, Madrid, Tecnos, 1998, pp. 147-149.
[7] Cruz, Dolores, y Utrera, Carmen, *Cronología de la Historia de España (IV) Siglo XX*, Madrid, Acento, 1999, pp. 24-25.
[8] Preston, Paul, *op. cit.*, p. 60.
[9] Paredes, Javier (coord.), *Historia contemporánea de España (siglo XX)*, Barcelona, Ariel, 1998, p. 566.
[10] Castells, Andreu, *Las Brigadas Internacionales de la guerra de España*, Barcelona, Ariel, 1974.

ha definido de la siguiente manera:

> (...), las Brigadas Internacionales no fueron, en absoluto, un movimiento espontáneo. Obedecieron a un plan específico de la Komintern autorizado expresamente por Stalin a finales de septiembre de 1936. De hecho, sin el inmenso aparato internacional de que disponía la Komintern habría resultado impensable la llegada de decenas de miles de combatientes a España[11].

Vidal piensa que los brigadistas no fueron a España voluntariamente, sino por la orden del Comintern. La postura de Vidal resulta completamente opuesta a la de Paul Preston, que insiste en que los voluntarios eran partidarios del antifascismo. Tal controversia de los historiadores se sigue hasta hoy y esta tendencia se ve con más frecuencia entre los especialistas españoles y extranjeros.

En octubre de 2001, en el Segundo Foro sobre las Brigadas Internacionales, celebrado en Albacete, Gaspar Llamazares, político de Izquierda Unida (IU), pronunció un discurso. Allí dio explicaciones acerca de las tres distintas visiones que existen en la actualidad:

a) Línea «franquista» (ejemplo: Ricardo de la Cierva), acusando a los brigadistas de estar a sueldo de Moscú;
b) Línea «aséptica» o «ecléctica», reconociendo que los brigadistas fueron voluntarios, pero que Moscú estaba detrás;
c) Los historiadores que, además de analizar las incidencias del contexto internacional, reconocen el altruismo, la generosidad y honradez de los brigadistas, conscientes de que en España se jugaba el futuro de la Humanidad[12].

---

[11] Vidal, César, *Las Brigadas Internacionales*, Madrid, Espasa Calpe, 1998, p. 350.
[12] Requena Gallego, Manuel, y Sepúlveda Losa, Rosa María (coords.), *Las Brigadas Internacionales. El contexto internacional, los medios de propaganda, literatura y memorias*, Cuenca, Ediciones de la Universidad de Castilla La-Mancha, 2003, p. 193.

Del comentario de Llamazares se supone que Paul Preston propugna la afirmación *c*, y por el contrario César Vidal se adhiere a la *a*. La mayoría de los especialistas en esta área que se muestran favorables a la *a* son españoles, como Ricardo de la Cierva, catedrático de Historia Contemporánea de la Universidad de Alcalá de Henares [13], ya mencionado por Llamazares. Se observa el conservadurismo en la historiografía española sobre las Brigadas Internacionales.

1-2. La vida de Jack Shirai

Dos autores se han ocupado en sus escritos de la vida de Jack Shirai: una es Ayako Ishigaki[14], crítica japonesa que trabó amistad con él cuando ambos vivían en Nueva York, en 1989; otro es You Kawanari[15], investigador nipón sobre la guerra civil española, en el mismo año. Según Kawanari, la vida de Jack Shirai se puede dividir en tres fases: la primera, desde su nacimiento en Japón hasta la llegada a Nueva York (1900－1929); la segunda, su estancia en la ciudad neoyorquina (1929－1936); la última, desde la entrada en España como brigadista hasta su muerte en el campo de batalla (enero－julio de 1937)[16].

En la época japonesa de Shirai, carecemos de la evidencia de su existencia, ya que en Japón no hay ningún documento oficial que certifique sus datos personales[17]. De ahí que no se hayan aclarado ni su fecha de nacimiento, ni lugar de nacimiento. La mayor parte de esta etapa se ha basado en suposiciones apoyadas en las investigaciones de los dos autores en los años ochenta. Debido a la escasez de especialistas sobre Shirai, se cree en la actualidad que sus datos,

---

[13] Kanou, Michiko, *Basuku to Spain naisen*, Tokio, Sairyusha, 2003, p. 124.

[14] Ayako Ishigaki (1903－1996) vivió en los Estados Unidos entre 1926 y 1951. Conoció a Jack Shirai cuando se manifestaban en Nueva York contra la invasión japonesa, comenzada en Manchuria en 1931. Durante esta estancia norteamericana se puso a escribir. Cuando en 1941 entre Estados Unidos y Japón empezaron las hostilidades bajo la Segunda Guerra Mundial, hizo público a su patria la necesidad del fin inmediato de la contienda con frases contra la guerra. Su libro sobre Shirai, basado en su propia experiencia, es apreciado como una obra que ha plasmado su imagen con brillantez.

[15] You Kawanari (1942－) es doctor en Sociología y profesor de Literatura Inglesa y de Historia Contemporánea de España de la Universidad de Hosei. Ha publicado numerosos libros sobre la guerra civil española. Jack Shirai ha sido el tema principal de su investigación.

[16] Kawanari, You, *op. cit.*, p. 19.

[17] *Ibidem.*

materializados por esos pocos investigadores, pueden ser los más fiables de todos los que se poseen.

Según Ishigaki y Kawanari, Shirai nació en 1917 en Hakodate, Hokkaido, isla situada al norte de Japón, y se crió en un orfanato trapense de esta localidad. En 1917, salió de Japón siendo marinero y se ganó la vida durante más de diez años con esta profesión. En verano de 1929, desembarcó en Nueva York, donde presenciaría el *crack* en octubre del mismo año. Vivió ilegalmente en la ciudad estadounidense hasta que partió para España en diciembre de 1936.

Su estancia neoyorquina ya está certificada a través del testimonio de Ayako Ishigaki. Shirai y ella se conocieron en las actividades del "Club de los Trabajadores Japoneses", grupo de la comunidad nipona de Nueva York, afiliado al Partido Comunista de los Estados Unidos[18]. Shirai trabajaba ilegalmente como cocinero en dos restaurantes japoneses de esta ciudad, y a la vez, pertenecía al sindicato de los trabajadores del gremio de la restauración, agrupación también asociada al partido comunista.

En la primera mitad de los años treinta, en el contexto de la depresión económica, la organización comunista norteamericana fomentaba los movimientos sindicales entre sus miembros. Shirai era uno de ellos. En septiembre de 1936, dos meses después del inicio de la contienda española, la leva brigadista comenzó en los Estados Unidos bajo iniciativa del partido comunista y Shirai decidió convertirse en voluntario extranjero.

Su itinerario en España lo cuenta detalladamente la obra de You Kawanari. En su libro aperecen las entrevistas llevadas a cabo por el autor a varios ex-brigadistas estadounidenses que conocieron a Shirai, como Alfred Tanz, el oficial de intendencia del batallón Abraham Lincoln y el jefe de Shirai[19]. Según la investigación de Kawanari, Shirai empezó a prestar sus servicios como cocinero en el Abraham Lincoln, estimando su experiencia en esta profesión en Nueva York. En España, estuvo en el barracón de primeros auxilios con el fin de preparar la comida a sus camaradas en el frente de batalla. Pero en la obra de Kawanari no se muestra ninguna entrevista, ni referencia a Harry Fisher, lo cual

---

[18] Ishigaki, Ayako, *Spain de tatakatta nihonjin*, Tokio, Asahishinbunsha, 1989, pp. 16-17.
[19] Kawanari, You, *op. cit.*, pp. 28-30, 55-56, 62-66, 103-106, 216-217. La entrevista se realizó en Los Ángeles el 25 de febrero de 1985 cuando Tanz tenía setenta y nueve años.

concede mayor envergadura al libro de éste, que contiene descripciones sobre el soldado japonés.

1-3. Jack Shirai en el libro de memorias de Steve Nelson

En 1958, cuarenta años antes de la publicación del libro de Harry Fisher, Steve Nelson (1901-1994), ex-brigadista estadounidense al igual que éste, aludió a Jack Shirai en sus recuerdos. Nelson tenía un pasado irreprochable como comunista, porque había sido ejercitado como espía en Moscú y había oficiado de agente secreto del Comintern antes de formar parte en las filas brigadistas en España[20]. Es decir, era una persona selecta en el Partido Comunista de los Estados Unidos, que lo envió a España para que conjuntara bien a los brigadistas norteamericanos.

Al principio, trabajó como comisario político del batallón Abraham Lincoln, formado oficialmente en febrero de 1937[21]. Cinco meses más tarde, en la batalla de Brunete, asumiría el cargo de comandante del batallón en lugar de Oliver Law, muerto en una operación de ataque[22]. Al organizarse el batallón, se encontraban 428 voluntarios extranjeros de nacionalidades estadounidense, canadiense, cubana e irlandesa[23]. Tanto el comandante como el comisario político desempeñaban la misión de dirigir a estos numerosos brigadistas y se consideraban los dos cargos más trascendentales y respetados del batallón. Nelson llegó a ocuparlos a sus treinta y seis años.

Nelson, en su libro, introduce una anécdota de Shirai. Se trata de la estancia en el frente del Jarama, alrededor de la capital de España, el mes de febrero de 1937. Shirai, en la batalla del Jarama desarrollada desde el día 6 hasta el 24 de febrero, actuó como cocinero. Sin embargo, él también pertenecía a la compañía de ametralladoras, puesto que quería librar combate por la causa republicana en

---

[20] *Ibidem*, p. 164.
[21] Schwartz, Fernando, *La internacionalización de la guerra civil española*, Barcelona, Planeta, 1999, p. 219.
[22] Fisher, Harry, *Comrades: Tales of a Brigadista in the Spanish Civil War*, Lincoln, University of Nebraska Press, p. 63.
[23] Schwartz, Fernando, *op. cit.*, p. 217.

el campo de batalla[24]. Cuando el brigadista japonés abandonó una vez su trabajo como cocinero, Nelson y sus compañeros le persuadieron enérgicamente a permanecer en la cocina del batallón. Nelson describió esta escena en los siguientes términos:

> (...) I said, "the health and the lives of our men depend on a good kitchen, and by God, we're only going to put our best men in there!... Now, who will it be?"
>
> Chorus: "Jackie! We nominate Jackie Shirai!"
>
> "No kitchen!" Jackie said. "Fight fascists!" No more kitchen[25]."

De esta conversación se deduce que el arte culinario de Shirai era fuera de lo normal, siendo así que sus camaradas le rogaron con perseverancia que siguiera cocinando para ellos. Según You Kawanari, el Dr. William Pike, médico norteamericano del servicio sanitario del batallón, también le convenció personalmente para que no dejara la cocina durante la batalla del Jarama, al igual que lo hizo el grupo de Nelson[26]. Además, Nelson aclaró que Shirai había querido ir al frente para combatir contra los "fascistas" nacionales, dejando el trabajo en la cocina. Adoptando la especificación de Nelson, resulta curioso saber que Shirai estuvo en la España beligerante por respaldar la ideología antifascista, al igual que la mayoría de sus compañeros del batallón. Kawanari, no obstante, ha propuesto un punto de vista enteramente contrario a la tesis de Nelson:

> Al enfrentarse con el combate feroz, Shirai dijo que abandonaría la cocina con tal de matar a los fascistas a tiros. Pero esto no sería la prueba de que fuera su clara creencia política, ya que la palabra "antifascismo" era solamente una fórmula gastada entre los brigadistas[27].

Tomando en consideración dicha indicación, el término "antifascismo", usado

---

[24] Kawanari, You, *op. cit.*, p. 106.
[25] Nelson, Steve, *The volunteers*, Berlin, Seven Seas Books, 1958, p. 123.
[26] Kawanari, You, *op. cit.*, p. 123.
[27] *Ibidem*, p. 219.

por los voluntarios extranjeros, no sólo significaba su ideario, sino que era su lema para luchar contra las fuerzas "nacionales". Después de todo, se puede decir que es muy dudoso que todos los brigadistas hubieran intervenido en la guerra civil española comprendiendo verdaderamente esta teoría política.

2. Los recuerdos de Harry Fisher

2-1. El valor del libro de Harry Fisher como documento histórico

El libro de Fisher, publicado en 1998, es la obra más reciente en donde se mencionan a los actos de Jack Shirai durante la contienda española. En estos últimos años, la bibliografía en la que hay explicaciones sobre Shirai, se ha limitado a la obra de Fisher. La importancia de su libro radica en que los movimientos del combatiente japonés se desarrollan en sintonía con sus aspectos ideológicos, dividiendo su estancia en la guerra en dos fases: la primera como cocinero del batallón; la segunda como ametrallador en el frente. Además, en la obra de Fisher, se insertó por primera vez en el mundo la foto del entierro de Shirai, tomada por Sam Walters[28]. You Kawanari se referiría a este hecho como una "sorpresa" en un artículo publicado en 2001[29]. Es decir, este libro aportó a los lectores una nueva información acerca de Shirai en la guerra de España.

Mientras tanto, se debe tener en cuenta una vez más el hecho de que hasta la actualidad no se haya encontrado ningún documento oficial sobre Shirai. Esto obstaculizará el curso de los estudios futuros sobre este personaje japonés. Por añadidura, igualmente hay que considerar que ex-voluntarios extranjeros vivos han llegado a una edad avanzada, debido a que han pasado más de sesenta y cinco años tras el final de la aventura brigadista. De entre los casi 2.800 brigadistas estadounidenses del total, hoy quedan sólo menos de 100, cuya mayoría son octogenarios y nonagenarios[30]. En vista de estas condiciones, no es de extrañar que de ahora en adelante no se publiquen nuevos libros de memorias de ex-brigadistas. En este sentido, la aparición de la obra de Fisher en 1998, cuya versión española salió a luz en 2001, resulta de gran interés.

---

[28] Fisher, Harry, *op. cit.*, p. 76.
[29] Kawanari, You, "Jack Shirai no atarashii shiryou", *Spain gendaishi* No. 13, Spain gendaishigakkai, 2001, p. 67.
[30] Requena Gallego, Manuel, y Sepúlveda Losa, Rosa María (coords.), *op. cit.*, p. 133.

2-2. La trayectoria de Harry Fisher

Fisher nació en Nueva York en 1911 siendo hijo de una familia pobre, de origen judío. Debido a que su padre falleció a sus tres años, Fisher se vio obligado a vivir en un orfanato de esta localidad, a petición de su madre[31]. Fisher sufrió la amargura de la vida desde su niñez al igual que Shirai. Los dos tenían varios puntos en común según relatan las líneas que traeré a colación posteriormente. El neoyorquino experimentó directamente la recesión crematística de la primera mitad de los años treinta, cuando trabajaba en unos grandes almacenes de esta ciudad. Con tal trasfondo social, se afilió a la Liga de Jóvenes Comunistas (YCL), perteneciente al Partido Comunista de los Estados Unidos[32]. Determinó intervenir en la guerra civil española a través de la conexión comunista lo mismo que la mayoría de los brigadistas.

En febrero de 1937, entró en la España beligerante como componente de la segunda expedición desde los Estados Unidos, siguiendo a la primera en la que se hallaba Jack Shirai[33]. Fue destinado al batallón Abraham Lincoln como soldado y en el frente del Jarama conoció a Shirai, entonces reconocido como *chef* entre sus compañeros[34]. Desde ese momento permaneció durante casi veinte meses en las filas republicanas, hasta volver a los Estados Unidos en septiembre de 1938[35]. En la batalla de Brunete, desarrollada en julio de 1937, sirvió de enlace de Oliver Law, el comandante del batallón, que cayó muerto en una ofensiva. Ulteriormente, Steve Nelson, comisario político, tomaría posesión del cargo de Law[36]. Tanto Fisher como Nelson se refirieron a Shirai en su libro de memorias, pero la posición de cada uno en el batallón había sido muy distinta.

Fisher, después de repatriarse, se convirtió en miembro principal del grupo Veteranos de la Brigada Abraham Lincoln (VALB)[37], formado a finales de 1939.

---

[31] *Ibidem*, p. 209.
[32] *Ibidem*, pp. 186, 209.
[33] *Ibidem*, p. 209.
[34] Fisher, Harry, *op. cit.*, p. 40.
[35] Requena Gallego, Manuel, y Sepúlveda Losa, Rosa María (coords.), *op. cit.*, p. 210.
[36] Fisher, Harry, *op. cit.*, pp. 59, 63.
[37] El nombre de la "brigada" en lugar del "batallón" proviene de la existencia de los Amigos de la Brigada Abraham Lincoln (Friends of the Abraham Lincoln Brigade: FALB). Esta organización fue fundada por el Partido Comunista de los Estados Unidos y durante la guerra apoyó el batallón Abraham Lincoln económica y humanitariamente. Según You

Participó en la Segunda Guerra Mundial como ametrallador de las fuerzas aéreas norteamericanas. Tras esta experiencia, trabajó en la sucursal neoyorquina de la TASS, agencia informativa oficial de la Unión Soviética[38]. Y en 1998, a sus ochenta y ocho años de edad, publicó su primer libro de memorias sobre la contienda española. Desde entonces, desplegó una actividad más grande que nunca, sobre todo en los VALB, grupo que sigue funcionando en la actualidad con ex-brigadistas vivos. Fisher murió a sus noventa y dos años, en marzo de 2003.

Al decidir tomar parte en las Brigadas Internacionales, Fisher secundaba con ímpetu el antifascismo, indicado por el historiador británico Paul Preston. El soldado neoyorquino expresaría sus sentimientos antes de ir al campo de batalla español como sigue:

> My anger was so strong, I knew I had to go. Fascism simply had to be stopped[39].

Estas frases presentan su fuerte repugnancia al fascismo. Por añadidura, esta tendencia ideológica de Fisher es consecuente en su libro y éste no vaciló en tachar en todas las ocasiones a "todos los soldados nacionales" como "fascistas". Un fenómeno similar se da, asimismo, en la obra de Steve Nelson. De esta circunstancia se entiende que ambos eran típicos brigadistas antifascistas.

2-3. Jack Shirai descrito por Harry Fisher

2-3-1. Shirai en la cocina del batallón

Fisher conoció a Shirai en el frente del Jarama en febrero de 1937 y trabó amistad con él hasta la muerte del japonés unos cinco meses más tarde. Fisher, en su libro de memorias, expondría las imágenes de Shirai en la cocina, subrayando su pericia:

> Jack Shirai was the cook for the Lincolns at that time. A

Kawanari, la razón por la que este grupo se llamaba la "brigada" radica en que intentó disimular el número de voluntarios norteamericanos en el batallón como para poder formar una "brigada".

[38] Requena Gallego, Manuel, y Sepúlveda Losa, Rosa María (coords.) *op. cit.*, p. 210.

[39] Fisher, Harry, *op. cit.*, p. 16.

Japanese-American from California[40], he had been a chef back home, and a dumn good one. He did things with garbanzos that made them taste better than any garbanzos I ever had.

Jack had two good friends in Spain, Mel Offsink and Max Krauthamer. I sat in on many of their bull sessions. (...) Shirai took pleasure in describing the food they would serve, the delicacies he would make. We listened in sweet agony[41].

En estas palabras, hay dos partes a las que prestar atención. En primer lugar, Fisher ha aclarado que Shirai tenía dos amigos íntimos Mel Offsink y Max Krauthamer en España. You Kawanari, investigador de Shirai, sabía solamente la existencia de estos dos amigos en el batallón, y gracias a Fisher pudo confirmar hasta su nombre[42]. En segundo lugar, la descripción de Shirai sobre su comida ha resultado sorprendente, lo cual ha dado relieve a la confianza en sí mismo. Tal acto de Shirai nunca se había mencionado hasta entonces.

2-3-2. Shirai al morir en el campo de batalla

Shirai falleció el 11 de julio de 1937 en pleno combate de la batalla de Brunete por haber sido tiroteado la cabeza o cerviz. En este caso, Fisher hizo una descripción con detalles. Primero, enfatizó la desolación de Mel Offsink, destrozado por la muerte de su amigo. A esta escena nadie se había referido hasta que lo hizo Fisher. A continuación, el ex-brigadista neoyorquino expresó que

---

[40] Muchos autores que se han referido a Shirai han señalado que llegó de San Francisco, la capital californiana. Harry Fisher, Andreu Castells y Arthur H. Landis, que publicó *The Abraham Lincoln Brigade* en 1968, lo han escrito en sus obras. You Kawanari, sin embargo, ha dudado de eso y ha enfatizado la posibilidad de que sólo viviera en Nueva York, porque durante su indagación no ha encontrado ninguna prueba de que participara en movimientos sindicales en San Francisco. Además, Kawanari preguntó a Alfred Tanz en la entrevista en febrero de 1985 si Shirai había permanecido en la capital californiana, pero Tanz no lo sabía con certeza. Después, Kawanari se disponía a ver a Arthur H. Landis, para cerciorarse de la veracidad de la hipótesis, pero debido a que entonces Landis estaba postrado en una cama por una enfermedad, tampoco lo pudo confirmar. Incluso en la actualidad, no se sabe si Shirai permaneció en San Francisco. Teniendo en cuenta lo afirmado por Ayako Ishigaki, que le conoció en Nueva York, en el libro no se alude en ninguna ocasión a dicha posibilidad, la suposición de Kawanari resulta muy convincente.

[41] Fisher, Harry, *op. cit.*, p. 40.

[42] Kawanari, You, "Jack Shirai no atarashii shiryou", *Spain gendaishi* No. 13, Spain gendaishigakkai, 2001, p. 67.

Shirai había participado en las Brigadas Internacionales para combatir contra el fascismo al igual que Steve Nelson y él mismo:

> Down in the ditch near headquarters there were dead comrades waiting for burial. One of them was Jack Shirai, our chief cook. (...) But then I saw Mel Offsink holding him, stroking his head; tears were pouring down Mel's face.
>
> After Jarama, Jack, insisting that he had come to Spain to fight fascism, had left the kitchen and joined the infantry. Again and again, we would repeat our wishes that he would go back to the kitchen. He always laughed and told us to go to hell[43].

Shirai, en el frente del Jarama, desempeñaba los cargos de cocinero y de ametrallador en el frente al mismo tiempo. Aceptada su petición, en la batalla de Brunete pudo dedicarse a la misión como ametrallador tras haber dejado la cocina. Por otra parte, Fisher ha escrito que sus camaradas, contentos con su comida, intentaban convencer a Shirai para que no abandonara el cargo de cocinero, pero el japonés nunca prestó atención a lo que dijeron. Shirai se aferraba a luchar en la primera línea como para dejar este cargo, que oficiaba con gran confianza en sí mismo.

Conclusión

Según la definición del historiador británico Paul Preston, gran número de brigadistas en la contienda española albergaban una idea antifàscista. Esta tendencia provenía de su afiliación al partido comunista, que secundaba la política contra el fascismo. Jack Shirai también pertenecía al Partido Comunista de los Estados Unidos, por lo que no es nada raro que apoyara el antifascismo.

Asimismo, Harry Fisher, en su libro de memorias, ha atestiguado que Shirai era antifascista en la guerra civil española. Esta explicación de Fisher coincide con la de Steve Nelson acerca de Shirai, aunque entre Fisher y Nelson había

---

[43] Fisher, Harry, *op. cit*, p. 64.

mucha diferencia de categoría en el batallón. Teniendo en cuenta el testimonio de los dos, se supone que Shirai difundía su idea antifascista en el batallón, hablando con frecuencia con sus diferentes camaradas en distintas ocasiones. De ahí se deduce que la insistencia de Shirai en luchar contra los fascistas, aclarada por Fisher, equivalía a la reiteración de esa voluntad ante sus camaradas. Es decir, por estos actos de Shirai, tanto Fisher como Nelson le conceptuaron como "antifascista".

Al mismo tiempo, esta consideración desde el punto de vista antifascista como Fisher y Nelson resulta demasiado subjetiva. Ayako Ishigaki, íntima amiga de Shirai en Nueva York, ha señalado que, al tomar parte en los movimientos sindicales de esta localidad, el nipón no comprendía ni las teorías, ni el sentido de todas sus actividades[44]. Por esta razón, se nos hace difícil imaginar que Shirai viviera la guerra de España por estricto convencimiento ideológico. En vista de la declaración de Fisher y Nelson en sus obras, en el batallón Abraham Lincoln había tendencia a llamar uniformemente a los soldados nacionales "fascistas". Después de todo, se conjetura que Shirai, que decía la palabra "fascista" en el batallón, no expresaba su pensamiento contra dicha ideología política, sino que solamente les llevaba la corriente a sus compañeros. Esta idea de armonía con ellos sería su verdadera "ideología" durante sus meses de estancia en el campo de batalla español.

Bibliografía

Antón Mellón, Joan (ed.), *Ideologías y movimientos políticos contemporáneos*, Madrid, Tecnos, 1998.

Carroll, Peter N., *The odyssey of the Abraham Lincoln Brigade: Americans in the Spanish Civil War*, Lincoln, Stanford University Press, 1994.

Castells, Andreu, *Las Brigadas Internacionales de la guerra de España*, Barcelona, Ariel, 1974.

Cruz, Dolores, y Utrera, Carmen, *Cronología de la Historia de España (IV) Siglo XX*, Madrid, Acento, 1999.

---

[44] Ishigaki, Ayako, *op. cit.*, pp. 124-125.

Fisher, Harry, *Comrades: Tales of a Brigadista in the Spanish Civil War*, Lincoln, University of Nebraska Press, 1998 (Versión castellana: Fisher, Harry, *Camaradas: Relatos de un brigadista en la guerra civil española*, Madrid, Laberinto, 2001.).

Ishigaki, Ayako, *Spain de tatakatta nihonjin (Un soldado japonés en la guerra civil española)*, Tokio, Asahishinbunsha, 1989.

Kanou, Michiko, *Basku to Spain naisen (País Vasco y la guerra civil española)*, Tokio, Sairyusha, 2003.

Kawanari, You, *Spain sensou —Jack Shirai to kokusairyodan— (La guerra civil española —Jack Shirai y las Brigadas Internacionales—)*, Tokio, Asahishinbunsha, 1989.

----------, "Jack Shirai no atarashii siryou"("El nuevo documento de Jack Shirai"), *Spain gendaishi* (*Historia Contemporánea de España*) No. 13, Spain gendaishigakkai (Asociación de Historia Contemporánea de España), 2001, pp. 66-68.

Landis, Arthur H., *The Abraham Lincoln Brigade*, New York, The Citadel Press, 1968.

Nelson, Steve, *The volunteers*, Berlin, Seven Seas Books, 1958.

Paredes, Javier (coord.), *Historia contemporánea de España (siglo XX)*, Barcelona, Ariel, 1998.

Preston, Paul, *The Spanish Civil War 1936-1939*, London, Weidenfeld and Nicolson, 1986 (Versión castellana: Preston, Paul, *La guerra civil española*, Barcelona, Plaza & Janés, 1987; existe una nueva edición de 2000.).

Requena Gallego, Manuel, y Sepúlveda Losa, Rosa María (coords.), *Las Brigadas Internacionales. El contexto internacional, los medios de propaganda, literatura y memorias*, Cuenca, Ediciones de la Universidad de Castilla-La Mancha, 2003.

Schwartz, Fernando, *La internacionalización de la guerra civil española*, Barcelona, Planeta, 1999.

Vidal, César, *Las Brigadas Internacionales*, Madrid, Espasa Calpe, 1998.

山崎眞次著
『メキシコ－民族の誇りと闘い－多民族共存社会のナショナリズム形成史』
新評論　2004年　316pp.

立岩礼子

本書は、メキシコにおけるナショナリズムの形成を考察している。著者にとって研究対象は、「違う人間がそれぞれの生き方を違うままに互いに認めあい、ときに摩擦を生みだしながらも尊重するメキシコ社会」[1]である。この社会を理解する上で不可欠な要素として、著者はナショナリズムを取り上げている。社会人類学者アーネスト・ゲルナーの説に従って、このキーワードを「政治的な単位と民族的な単位とが一致しなければならないと主張する一つの政治的原理」[2]と定義した上で、明快に論を展開している。

かつて先住民の地であったメキシコが、スペイン人の侵入を許し、黒人やアジア人を受け入れ、そしてメスティソを誕生させたことを考えれば、国家成立そして発展の条件として「政治的な単位と民族的な単位とが一致」する必要があったことは明らかである。メキシコはアメリカ合衆国をモデルに近代化を目指してスペインから独立したが、先住民を国民として取り込むことに苦慮し、従ってアイデンティティの確立にも時間を要してきた。本書は、メキシコの中央政府による民族の政治的な「統合」を、逆の視点から、つまりメキシコで生きる様々な民族の「共存」という視点から考察し、メキシコ・ナショナリズムがいかに形成されてきたかを検証している。

ナショナリズムという概念は18世紀から使われ始めたが、本書では独立国家として成立する以前の古代メキシコにまで遡って考察している。これは、メキシコのアイデンティティを育んだ歴史的土壌を整理するという入念な仕事であり、ナショナリズムの形成を辿るには不可欠な作業なのである。ラテンアメリカ諸国を対象とする場合、古代史、植民地史、近代史、現代史と区別して研究することが多いが、著者は古代から現代を網羅し、メキシコを深く理解しようとする真摯な姿勢を貫いている。そして、その内容は国内外の研究者も見逃しがちな歴史上の事件に丹念な裏づけをして考察している。

著者は、まず、なぜトラスカラ族がスペイン人征服者と同盟を結んでアステカの

---

1 山崎眞次『メキシコ－民族の誇りと闘い－多民族共存社会のナショナリズム形成史』、298ページ。
2 同書、23ページ。

覇権に反旗を翻したかという謎を解きながら、もともとメキシコに存在した原始的ナショナリズムとしての部族主義的共属意識を明らかにする(第2章「アステカ族とトラスカラ族の対立:古代社会の部族主義」)。続いて、エンコミエンダ廃止に意義を唱える征服者コルテスの息子らの本国に対する謀反から、すでに16世紀半ばにクリオーリョの共属意識の核が形成されたとし、クリオーリョ意識の萌芽は植民地時代末期とする定説を疑問視している。さらに著者は、19世紀後半に初のメスティソ出身の大統領となったベニト・フアレスに先駆けて、コルテスがマリンチェに生ませたもう一人の息子がメスティソの祖としての存在感を見逃さず、すでに植民地時代初期にのちの国家形成の原動力の胎動を予感している(第3章「マルティン・コルテスの謀反:クリオーリョ意識の芽生え」)。そして、セルバンド・ミエル師が説教に聖母グアダルーペを登場させたことに着目し、先住民、黒人、メスティソ、クリオーリョ、スペイン人から構成されていたメキシコ社会において「政治的な単位と民族的な単位とが一致」する、あるいは「共存」するため、「スペインとまったく対等の聖母信仰をメキシコが所有することによって初めて、メキシコ人がそれまでさいなまれてきた不平等感から解放され、本国人から精神的に自立することができる」[3]との結論に達している(第4章「グアダルーペの聖母顕現に関する司祭ミエルの説教:クリオーリョ主義の台頭」)。この聖母がいかにメキシコ国民の統合のシンボルと化したかについては未だ議論の対象ではあるが、著者の論証には説得力がある。

以上を考察した上で、本書の中心はメキシコ近代史のハイライトである米墨戦争(第5章「米墨戦争と英雄幼年兵:反米ナショナリズム」)、メキシコ革命と石油国有化(第6章「外国石油企業の国有化:資源ナショナリズム」)へ移る。そこには「おそらく米国との関係において世界で一番苦慮してきた国」[4]が映し出されている。そして、独立国家として地位を確保したメキシコにおいて「政治的な単位と民族的な単位とが一致」を見るためには、再び直面したアイデンティティの問題(第7章「コルテスの遺骨発見:スペイン主義の巻き返し」及び第8章「クアウテモクの遺骨発見:インディヘニスモの高揚」)に立ち戻る必要があった。ここでは、20世紀に入っても尚コルテスやクアウテモクの遺骨の扱いをめぐって論議が繰り返されるメキシコの世論が検証され、まだ「統合」にも「共存」にも達していないメキシコのアイデンティティの模索の過程が浮き彫りにされる。また、メキシコ独立以前については年代記をはじめとしたオーソドックスな史料を用いて検証しているのに対して、独立後は遺体に語らせるというユニークな手法で論証している点も面白い。そして、本書の最後は、メキシコが自国の歴史をいかに紡ぐべきか、次世代にメ

[3] 同書、115ページ。
[4] 同書、1ページ。

キシコの歴史をいかに伝えていくべきかという問題に結び付けられ、歴史教科書と政治の問題がクローズアップされる(第9章「歴史教科書論争:現代ナショナリズムの様相」)。メキシコ・ナショナリズムの形成史を辿りながら、ふと日本のナショナリズム、対米関係、教科書問題などが気になり出す。

現在メキシコをテーマにした日本語文献は文化から経済まで幅広く出版されている。近年は、とりわけ先スペイン期から現代の諸相を網羅したメキシコ通史が充実してきた。国本伊代／畑惠子／細野昭雄著『概説メキシコ史』(有斐閣、1984 年)は、国本伊代著『メキシコ史』(新評論、2002 年)と鈴木康久著『メキシコ現代史』(明石書店、2003 年)により一新された。大井邦明／加茂雄三著『ラテンアメリカ』(朝日新聞社、1992 年)、染田秀藤編『ラテンアメリカ－自立への道－』(世界思想社、1993 年)、増田義郎／山田睦夫編『ラテンアメリカ史』第1巻(山川出版社、1999 年)、加茂雄三編『ラテンアメリカ』(自由国民社、1999 年)も良質な情報を提供してくれる。フランソワ・ウェイミュレール著『メキシコ史』(染田秀藤／篠原愛人訳、白水社、1999 年)は、原著の初版が 1953 年であるが、「メキシコ史を理解するうえで必要不可欠な基本的事柄を簡明に記述した貴重な入門書」[5]である。とはいえ、「歴史事実だけに覆われた歴史解釈の難点、歴史上の人物の人間性、有機性に関心を抱けば、その解決に焦燥感を募らせる」[6]のであれば、1994 年に発表されたエンリケ・クラウセ著『メキシコの百年 1810－1910』(大垣貴志郎訳、現代企画室、2004 年)が解決してくれる。

いよいよ日本人が独自の視座でメキシコの歴史を理解する時期を迎えている。増田義郎著『メキシコ革命－近代化のたたかい－』(中公新書、1968 年)刊行後、36 年ぶりに本書が上梓されたことは大変意義深い。しかも著者は日本の将来を見据え、マイノリティを尊重する社会への模索や対米外交方針の検討にあたり、メキシコは日本にとって参考になる国だとしている[7]。本書は、日本人がメキシコを研究することの意義を教えてくれる貴重な一冊でもある。

---

5 フランソワ・ウェイミュレール『メキシコ史』、169 ページ。
6 エンリケ・クラウセ『メキシコの百年 1810－1910』、380 ページ。
7 山﨑、前掲書、3 ページ。

ホルヘ・フランコ著『ロサリオの鋏』
田村さと子訳　河出書房　2003年　229pp.

中村多文子

この作品は、コロンビア出身の新進気鋭の作家ホルヘ・フランコ（Jorge Franco Ramos, 1962－）の第三作 *Rosario Tijeras* (Plaza & Janés, Bogotá, 1999) を田村さと子氏が翻訳したものである。ホルヘ・フランコはこの作品で、1999年にコロンビア文化省の小説部門で奨学金を得るとともに、翌年スペインの「ハムレット国際小説賞」を受賞している。

フランコはコロンビアのメデジン市に生まれ、ロンドンで映画について学んだ。帰国後、小説を書き始め、1996年に『*Maldito amor*（呪われた愛）』（Ed. U. Central, 1996）でコロンビアのペドロ・ゴメス・バルデラマ小説コンクール(Premio Nacional de Narrativa Pedro Gómez Valderrama)で第一位、1997年にも『*Mala noche*（悪い夜）』(Plaza & Janés, 1997)で第14回ペレイラ市主催小説コンクール(Premio Nacional Ciudad de Pereira)で第一位を獲得した。『ロサリオの鋏』で作家としての地位を築き、G・ガルシア・マルケスに「フランコにこそ私の文学の火をともしたい」と評されてその才能を認められ、現在はキューバの映画テレビ国際学園でシナリオ教室「物語の作り方」を担当している。

『ロサリオの鋏』の舞台は、「麻薬戦争」がおこり、人々が恐怖におののいていた1980年代末のコロンビア第二の都市メデジン市である。そこに住む若者たちの暮らしぶりや、彼らを取り巻く人間模様が背景となっている。主要登場人物は中産階級出身の大学生「俺 Yo」、彼の友人エルネスト、この二人が恋をすることになる貧困層出身のロサリオ、麻薬社会の被害者となった若者フェルネイとジェンジェフである。この小説では、マフィアに直接起因する問題が中心に据えられてはいるが、これが社会階級による差別、生活レベルの格差、教育の不足、未成年者の出産、父親を知らない子供の誕生などにまで広がっている。しかし、これら全ては「俺 Yo」のロサリオへの恋物語の中に覆われてしまい、一つ一つが深刻な問題としては浮き上がってこない。どれかひとつを強調することを避け、ひとつの問題の中に隠されている様々な側面を多様に提示するという、ラテンアメリカのリアリズムの特徴が窺える。メデジン市に生きる個人が一つの社会を映し出し、さらにはラテンアメ

リカの多くの地域に見られる問題をも顕わにしている。

この小説の魅力の一つに、我々読者が気付かない内に物語が時空を越えているという巧みな時間の扱いがある。フラッシュバックはガルシア・マルケスなどの作品によく見られるが、この物語においても何の前触れもなく時空の超越が行われている。物語は、主人公で語り手でもある「俺 Yo」がロサリオと過ごしていた頃を度々回想しながら展開していくが、現在から過去へ、そして過去から現在へという時間の交錯は、映像が流れていくかのように視覚的に描写され、滑らかである。主人公が回想している間も時間は進んでいるはずなのだが、「俺 Yo」の時間は止まったままであるような効果を残している。ラテンアメリカの作家が時間を操るとき、並行して死の存在もテーマとすることが多い。この作品においても死はテーマの一つとなっている。メデジン市の若者にとって、マフィアの組織に入っていくことは生きていく手段の一つであり、常に死を覚悟して生きることを余儀なくされる。それでも生きていく若者の生き様に、生と隣り合わせの死が描かれる。

この作品において、フランコはラテンアメリカ文学の伝統を継承しつつも、若者を主体にして独特の世界を創り上げ、その斬新さが異彩を放つ。これは、若者の性に対する感覚や暴力としての性として描かれるエロチシズムに表れている。60年代のラテンアメリカの作家たちがエロチシズムのタブーを破って性的テーマを扱い始め、フリオ・コルタサルが放縦な表現を試みたとされるが、フランコも作品に登場する大学生の性に対するとまどいや性欲、性行為をストレートで大胆に表現している。しかし一方で、「俺 Yo」が決して語らないエロスも存在し、それが大胆な性表現と効果的に対比されている。

もう一つの斬新さは、若者の複雑で繊細な感情表現の豊かさである。バルガス・リョサも *El País* 紙に「作品がパチパチ音をたてている」とフランコの生き生きした言葉遣いを評価している。スペイン語の表現の豊かさが日本語にも見事に訳出されている。例えば、「俺 Yo」がロサリオとの決定的な別れを感じた時を回想するシーンである。Abrazado a la almohada sentí pasar nuevamente uno a uno los sentimientos que ella me despertaba, y con ellos volvieron a mí las mariposas en el estómago, el frío en el pecho, la debilidad en las piernas, la desazón, el temblor en las manos, el vacío, las ganas de llorar, de vomitar y todos los síntomas que atacan a traición a los enamorados.「枕を抱きしめていると、彼女が俺に抱かせたさまざまな感情の一つ一つが頭の中に浮かんだが、それと同時に胸がうずうずしてきゅん

と締めつけられるような、ちくちくするような、両脚がふわふわしているような、手が震えて、ぼうっとなって、泣きたいような、吐き気をもよおさせるような気持ちがふたたび俺を襲った。」(p. 208)。邦訳では mariposa が「蝶」と訳されず、「うずうずしてきゅんと締めつけられるような」と訳出されている。蝶はメタファーである。蝶は花から花へと舞い、花にとっては触れられると何故か嬉しく、蝶は温かい感情をも運んでくれるものだろう。しかし、そこに蝶がとどまってはくれないという花の切ない悲しみに似て、「俺 Yo」の胸は締めつけられるのだろう。この蝶は「俺 Yo」にとって、自分に近付いては来るが、去って行くロサリオである。主人公の切なく繊細な気持ちは蝶をメタファーに見事に表現されている。

コロンビアの若者の成長や思春期の複雑で繊細な感情は、田村氏の邦訳によって日本人でも感情移入しやすくなっている。詩人である田村氏だからこそ成し遂げられたものであろう。田村氏はこの作品の訳出にあたって、コロンビアに出向き、フランコに会っている。『ロサリオの鋏』は詩人の感性と作家の創造性が生み出した作品とも言えるだろう。ラテンアメリカ文学の伝統を受け継ぎながら、新しい世界を創造していくフランコの今後の作品が待ち遠しい。

REHK 投稿規定

(2004 年 11 月 11 日一部改定)

1. 本誌への投稿は京都イスパニア学研究会の会員に限る。ただし，本会が依頼した寄稿・講演の原稿等はこの限りではない。

2. 本会が依頼した場合を除き，執筆者は所定の印刷費を支払うものとする。印刷費の額については，その都度連絡する。

3. 原稿の種別は論文・研究ノート・書評・翻訳・資料とする。

4. 原稿は 9 月末までに＜規定 12＞の宛先に送付すること（期限厳守)。

5. エッセイ・回顧録等は記念号を除き本誌には掲載せず，会報に記載する。

6. 原稿の採否は，編集委員会が審査し決定する。

7. 提出された原稿について，編集委員会は意見を述べて修正を要請することがある。

8. 編集委員会が要請した場合を除き，提出後の原稿の書き足しや差し替えは認めない。

9. **製本は，提出原稿を使用する。従って，提出原稿は，下記の要領で清書プリントされた完成原稿でなければならない。**

記

(1) 用紙
A4 版の用紙を用い，REHK 第 1 号～第 4 号に近い形で完成させる。製本の際には，A5 版に縮小されることを念頭に置くこと。(A5 版は A4 版を 70%縮小したもの)

(2) 余白
上下左右とも 25mm とする。

(3) 書き出し
第 1 行目：タイトル（太字，センタリング)
第 2 行目：空け
第 3 行目：氏名（右詰め)
第 4 行目：空け
第 5 行目：書き始め

(4) 註
文末註でも脚註でもよい。

(5) 原稿枚数
論文：和文で，34字×33行で15枚程度
欧文で，33行で18枚程度
研究ノート：和文で，34字×33行で10枚程度
欧文で，33行で12枚程度
書評：和文で，34字×33行で3枚程度
翻訳：和文で，34字×33行で10枚程度
資料：和文で，34字×33行で10枚程度
なお，枚数には，書き出し部分，本文，註，参考文献を含む。

(6) ページ番号
原稿の最下部に通し番号を付すること

(7) 文字のタイプとサイズ
和文の場合は，明朝体で12ポイント
欧文の場合は，Centuryで12ポイント

10. 前項の規定（1）～（7）に反する原稿は原則的に受理しない。

11. 原稿送付時には，以下のものを必ず揃えて提出すること
① 完成原稿をプリントアウトしたものを3部。
② 完成原稿の入っているフロッピーディスク（Windows のMicrosoft Wordに限る）を1枚。
③ 種別（<規定3>）を明示したもの。
④ 和文の場合は，スペイン語タイトルおよびローマ字表記の氏名を明記したもの。

12. 完成原稿の送付先およびREHKに関する問い合わせ先：

〒612 - 8577
京都市伏見区深草塚本町67
龍谷大学文学部　安藤真次郎研究室
Tel:075 - 645 - 8521（研究室直通）
E-mail: shinjiro@let.ryukoku.ac.jp

以上

編 集 後 記

皆様のご協力により、REHK第12号が刊行の運びとなりましたのでお届けいたします。今回は講演1点、論文3点、書評2点を掲載することとなりました。

昨年度の第12回大会は2003年12月7日（日）にキャンパスプラザ京都で開催されました。研究発表は、村田真喜子氏（ラテンアメリカ史）、安田圭史氏（スペイン現代史）、3期6年間の長きにわたって会長職を務められました三木一郎氏（スペイン語統語論）、塩見千加子氏（スペイン史）の4名により行われました。恒例の記念講演会は清泉女子大学より吉田彩子先生をお招きし、「Luis de Góngora, "Soledades"の生成—第一部 Serranasの描写を中心に—」と題して、スペイン文学の中で最も難解とされるゴンゴラの詩作品を明解にお話しいただきました。講演の内容は本誌に掲載いたしましたので、是非ご高覧ください。

昨年の総会におきまして、本年度より「京都イスパニア学研究会」と名称を改めることになりました。一つには、例年、京都外国語大学大学院イスパニア語学科修士課程修了者以外の方からの寄稿も少なくなく、当研究会が外部に対してより開かれたものにすべきだという趣旨があります。また、スペイン・ラテンアメリカ関係の研究者層の拡大により、それぞれの個別研究領域の細分化は不可避なものとなりました。そのため、スペイン語圏全般を対象とする人文・社会科学を「イスパニア学」という名のもとで総合的に研究を進めるという理念を反映させる意図もあります。長年、会員の皆様に親しまれてきた「修士会」という名称にもついにお別れとなってしまいましたが、これは「京都外国語大学イスパニア語学科修士会」が12年の歳月をかけて着実に発展を遂げてきた結果であり、時代の要請に応えるべくして迎えた一つの転機であると考えております。今後もこの古都の地より、スペイン語圏の総合的な「学」である「イスパニア学」の研究成果を発信し続けていきたいと思っております。

（岡本信照）

REHK (Revsita de Estudios Hispánicos de Kioto)
２００４年１２月５日　　印刷
２００４年１２月５日　　発行

発　行　所　　京都外国語大学イスパニア語学科
〒６１５－８５５８　京都市右京区西院笠目町６

発行責任者　　岡　本　信　照
印　刷　所　　都　印　刷
〒６００－８３１８　京都市下京区北小路新町西入る

R E H K

Revista de Estudios Hispánicos de Kioto

No. 12

Conferencia:

Sobre la generación del texto de las *Soledades* de Góngora
—el caso de las serranas de la *Soledad* primera—
..... Saiko Yoshida (1)

Artículos:

Una consideración sobre una svástica de forma de estampa excavada
en el castillo de Nakijin ..... Atsushi Uema (23)
Una reflexión sobre la importancia del comercio de añil
en Nueva España (1558-1810) ..... Makiko Murata (35)
La ideología y los actos de Jack Shirai en la guerra civil española
según el testimonio de Harry Fisher
..... Keishi Yasuda (53)

Reseñas:

YAMASAKI, Shinji: *México, orgullo y lucha de un pueblo —Historia de la formación del nacionalismo de una sociedad multiétnica en coexistencia—* (Shinhyoron, 2004)
..... Reiko Tateiwa (69)
FRANCO, Jorge: *Rosario Tijeras* (Trad. por Satoko Tamura,
Kawadeshobo, 2003) ..... Tamiko Nakamura (73)

2004
Asociación de Estudios Hispánicos de Kioto